# 湖月抄　夕霧

44

## 夕霧

花 巻ノ名以テ哥ヲ号之 河 山里のあはれをそふる夕霧にたちいでん空もなきこゝちして 孟 詞にハ夕霧とかはりあり 細 源五十歳 鈴虫ハ八月十五夜まで也 よりて此巻ハ鈴虫の巻の末より十二月までをかけり

まめ人の名をとり
河 殷季 文選 又 真人（まめびと）
細 夕霧実法なる名をとれり
給ふとぞ 抄 かしこがり
賢にふるまふとぞ夕霧乃
柏木のうへなどをかたらふ
しかれどもあはれにまさり
孟 氏族排韻韓琦語云
保初節易保晩節難
人まさに附いしるなめども
後ハさもあるまじくさ
しなきとのをしへ也 頻
黒と実法なる人なれど
玉みつくせうぶれ夕霧ハ
落葉にまどはされ
呂谷記之

まめ人の名をとりて・さかしがり給ふ大将・（賢だてしたる心）此一条の宮の御ありさまを・なほあらまほしと心にとゞめて・おほかたの人めには・（落葉 夕霧の心之）むかしをわすれぬようゐに見せつゝ・（抄 柏木の遺言をわすれぬやうにと也 河 用意）いとねんごろにとぶらひきこえ給ふ・下の心にはかくてハやむまじくなん・月日にそへておもひまさり給ける・みやすん所も・（細 落葉の宮の母君を云之）あはれにありがたき御こゝろばへにもあるかなと・（夕霧の志をかんじ之）いまはいよいよものさびしき御つれづれを・（孟 夕霧）たえずおとづれ給ふに・（の御訪よりて慰之事之）なぐさめ給ふ事おほかり・はじめよりけさうびても聞え給（細 夕霧の心中之）はざりしにひきかへしけさうだゝんもまば

めかむもまばゆし。たゞふかき心ざしを見えたてまつりて、うちとくるおりもあらじやはと思ひつゝ、さるべき事につけても、宮の御けはひありさまを見給ふ。みづからきこえ給ふ事はいとかたければ、いかならむおりに、思ふ事をもまほにきこえしらせて、人の御けはひを見むと思しわたるに、御息所物のけにいたうわづらひ給ひて、小野といふわたりに山里もたまへるにわたり給へり。はやうより御いのりの師にて、物のけなどはらひすてける律師、山ごもりして里にいでじとちかひたるを、ふもとちかくて請じおろし給ふゆへなりけり。御車よりはじめて、御前など大将殿よりぞたてまつれ給へるを、なかなかもとの人々は、ことわざしげく、おのがじし世のいとなみにまぎれつゝ、え思ひもいでず。弁の君ぞ、はた思ふ心なきにしもあらで、けしきばみけるに、ことの外なる御もてなしなりけるを、しゐてまうでとぶらふも見えずなりにけり。宮はいとしのびて…御いのりにおはします…修法の…

細 女二宮ハ…
孟 女二宮の夕霧に対面なきどもある也
細 花鳥に云をもとり比叡山麓惟喬親王の住給へる所也 わたりなるべし 花ひえの横川のかたにあり 〈書〉
れいのりのし 細 河海 恵心僧都と引…
河 恵心僧都…
山籠の君は要叙の尼…
ふもとちかくて対面の… 撰集抄に小野八丸 叡坂本今の大原也 抄 箋用河海義
ことわざしげき 孟 世中にある人ことわざしげきものなれば 古今序
弁の君 細 柏木のさうしつぎ
のすゞ柏木遺言せし人 紅梅 孟 紅梅右大臣也
これも女二宮にまゐらせたる也…
細 伊勢物語…
天文廿一六八記之 孟 表紙…

おさことの御ろ〳〵にてそあしなりけるにえらみてえらそてあらたとおもり無思始より
けらうやうさてよしよりし故よるものおそりてあきれしうぞふかそて入ますひあぐるもえし給
いぬかり愚本かく抜く変別名あし尚追而三家之本をとるべし

やうのこ侮りなる拙をさへ葉れ給ふやとあへ
孟 宣旨書之箋今の世よ借
悲のあふ〳〵し
べえ夢のし給ひぞるべくのせんじがきハ物
人〳〵の詞之
書とりあるべし
しとがりしめぐくにとえるさハ侮る
お夕霧のあつりふくさん人あるべし
のちとへんでえてかれバ名ぞハうくりさ
細 女二の宮の息所のかほの方にて出の言之
こく給ひてハいしゆりしげかくうでひと
そりあぐとがかとりかりさぶ侮こしそ
をるえ〳〵しさ所かさえ人あ多きいよく〳〵
細 夕霧のん之
あそしうめとおりて去げうさてしうまひ
主上人と夕霧の中にて小六わかりし
給ふるつかるよおりかやうかえぐされなるうひ
細 雲井雁之 眼 雲井雁推量として
あめりしこのことりきとりさ

あしてまかりしう坊がもとし
小野へうつりひらく御かりせ
じく雲井の推量しつし
くてえらひてらかつなと之
八月中の十日ばかり
河横綾絵式同板紀奥入
番給出ま八月十五日まで
出るり〳〵給ハなる比のさ之
義大高ハあまくのさうしを
法するき〳〵それと暑さら
れするし
まかりさくさのとやま
河松崎山 山城の 花雲が
院ハひえの山の麓お宗の
かり所く
秋のなしさつるそて 細 ひなき

ハまづうり〳〵そまうで、ましりうう坊とどこ
細 夕霧のん之 無本まてまかりうてウテくるしゝ
ところえりぐく給ふ八月中の十日
ぞうりるれバの人の気色もおかしきに
なりよ山里のあり侮のいとゆかしかれバ
おタ霧お小野とういやりあって
あよりしつあしのめぐらしうありさまに
主上人夕の詞之 御息所のかおの侍之 山路も一つ山下せしとそし
をちよりつしかべきとしありやとて所
のちづし給ふもとうひひとそへまう
でんと拙侮さふぞさしごうていそ給
御前こうくしろてそゝしさ限なひ
人だうか家にてさうひ侮こそほふう
きゝうちあくねとまりがさ丸のとやまの
箋 四時不変の巌と秋のこ気色まさそゝやされしあく
いろあさも さらいかれてねどあさきの気

づくそとの今すて談切て
ころへしかまそで八石を
うらとそり
願にしるくとつてこうり
細若より小我の山荘之
見学口くうわきさ小柴垣を
いふより山荘のなろなる
べし
あられもなくもまきり
てぞこなきうくみろ三三宗
がきても　仲みらをかゝり
より藤の花の下のさ海
あそびにまそて之ぬ
主人庭と出まりき
紫式部の源氏と八代
らわるもを取りその
源氏にもくしれく
出かりこくく
人まうろう　ちりぬ
細地の言のるかくさそを
二に急でて西作つる
孟邪執八人ころろ池
いかれくく

色づくそて願にかくくこ一くーしこうち風ねよ（細匂）
はい古紙衣もけりもまきんてぞこ西ろ
や。そうろすきこ宗がこもゆへありさ使よ
志るしてうりそやうすれどおてそきよ
修君まるしまくりぞさん居なし出がりしこさなん（をさむ）
ぐのそろうらいに、よ法のぐくんぬうて
こきこのひさしよ出もしまれてふし出りく（孟臣息才八小の底　女三八病み西く）
よ言八出くしまそこれ。ハりめてけむつーしと（細女八まましませとのあひく）
てとじめなりもろれて。いりぞりそうれ
まうんと。志てひうさうりしますろを。今よ（女三乃之）
うりちるどがちてずそうのくでそて。ぞ
りよ、防をこよハウてしまりあつとまくらう（小良示のけ万へ八女三とく）（夕霧と抱て云）

ゆうまそのすゑせワてろせ
まうまろん西　夕霧のうく
まて朝顔侍ひのふとい
とうそーけうてまりふとふ
んをあくめくり
このうこまりをざるよ
桜　夕霧の顔よきまん
をひまくもろしくぬて
八流礼をまへやぎこさと
古示より今か命どうけ
とわたるさんの付てうさ
孟次法礼をかうけ通ば
なうへまきと。細息示の
胡く

しのねすべきそしろのあうけまいざやり（盃女三の…）
れくこのえれまんまいれまりてしらう（赤まく夕霧といろしく）（細川息示）
じろんぐれせうそここてしつていと
うしけろくうざきでの給つをこえく（の細人伴の細人）
せさまろるとろん。めしひるてたりワそ
給なば。このしこまりとぶまいきこてさせ
でやとまでまよまん。いまえずしりけ
とじめすりしさこころつきかおとい（細夕霧の細借…）
えいそしまてハウうしき給し流るをくう
よりしと給しと。六条院よりけ給つり
きしころとゆし雅てこれん。国ごしろつも
そこワうとちくまざろてこしゆぞと（掛衣裏）

これハ殊暑(?)のうちとの人々まで

まううろゝのわざとしりハこゝろすゝく

うは州らんぎうしこしの。らうしう絵

あどきうてし絵ぐやいれくのくさまいとし

のびておかしきせいど。こしくしうしぬさ

ひのれまつりひ。あさまやかにわかち地をし

の程ぞ人のけはひとのぐしきえし。

をとやうくまくしうしとおどろきさるじ

絵れぞのとこすひさげりうずてマとし

こゝね給つりうらもそくしよ地かて。

あるよのれせうそこへ給ぼそうしと

とうへてぞひすよ。例のかれのきえなる。

まかでぬ人でうよ物語などしあそびうく

孟 廿二の巻ひておかしきすゝえ

細 クリ物の猿(?)の巻之

廿二のクしき夕顔の人のかえ(?)きとく

細 女子人と推量しうり

夕顔もく

細 此息宗の山房 程を(?)きとく

細 夕霧の詞

例のかね 細 小ツかねハ此息宗のおいの大和のちぐいりをとく。蕎麦(?)の文のいとなる事也

やまさるれうけ絵りうしこの。まじとうへ

よかりるけりよこまのうりのどくとぞ

てうらせまうるうしめしさうんりうこ

のまへふゝく人ぐそのれをうそこれどの。

おのうまいさのしつてつろこどよ。すごこそ

あまりるめ。つりまうりめしいさ海よ人で

ほく忽之給んとぢらしとなすすん。らん

ひつかしれりくさりうりし帰(?)ど。おの

すさうりるこよ地をるれるやうしうハうう

うるくあうりも笑てざうまし。又ようど

うりそくぜくおう。地れてとしうり人へむ

ひわうじうしよの給。げるいとある法り

細 柏木の没三年の後

味 好色の人などうりくハうとうじとく

孟 我宴なれハうとそ

浅茅の所の(?)そ

美 おの年

みめ房衣の(?)

わのおさうくろうきにおもと

まこみぞしうべ 細 夕霧そく

ろごうにもうれざうり

よりてうりくさしそうさ

せのやうすどハあうまじ

さ事とそうとうすり

地れて年ふる 箋情を

おくゝ自讃の詞ふれての

てりし情てしむ 細 地れ

てのて文よ古が濁て様

是実のけれとさゝめす

是ハ夕霧の自歎之。かや
うの心勝を知りて随然
なる人はまことき事之

うそまよひつゝかけさせしさ
せ給ふも猶ゆへある 抄 河
夕霧の親しく何故より
と八落葉を我のなり出来に
まよ細とひかうく
うしけるなれと 細 文を示
のほうりを給ふとしも二の文へ

細 さやんしり御覧のかんさき
みくげうかさ悔しあくれいされどしいほ
幸そのうらうかなく〳〵のやして
くなる心かくへゆめしいでんいちろうしうさで
小かねさし女三文へや知と
つらしろひく。うらめかれへさうしめく
細 文の心細
さらねやうるかりと文るせゆれいあつら
孟 心息所の代
大そうしと心息所のうえ
らんれし給いずあかさつく いさきよりなう
二ゝ女三の羽面おうへきをとも
孟 心息所のものけと見て文もうさと思之
給ふべきうれいと柳そうしさゆそりのし
給わりしとこあうふひ給し猶よいらしあ
孟 此間人そて女
あらかさうのふらよなりてあん文ゆくぬ
細 夕霧之
文の云出しうく
とあれいこは文の此まうしそこうとるな
細 夕霧の親之 抄 心息所のうへさく
とうてふかうしきなるやこ代あようみ
まちしの師く
りうずけさせしさせ給ふも。あるの心人よ
師 文を思すなれそと之
白
くおかさみけるゆきれど。抄代学しきうれ心

のまよそてありしく 抄 落葉のうすと御角かをハ恐あれとも之のかく
物と思わしさう 細 心息所のうるもしふきられくしうんかで女二の文さつうにて給へからん
とくおうらうさうのらうようりてと文の於のふまつさそ。夕霧の夜ままられども
うまし文の此すうる萩同義

細 我方の志をも文も示の
方へのとも衿なかうハり
ひるのしとくし孟 心息所よ
ふを入てまいるとびうり
おかしめをへ無こを思せま
よふをうけてまうるとこ

くあまさご悔よ

日ふうしかきそ 師 山里の
さ悔をきべしとさく 河 同く

落 心息所のうえ
猶なるじなれくさうしさまもうきよう
抄 落葉の所のさをもうがらせよかへく
あらし給すくいあいうろまどぐし給え
抄 落葉の心さぬも心息所の心ともようろんとく
んこそ。さうれしよりもよめりし記こと
みは給ふめとぞしつうさうしさそうう
抄 ふさてとさ之 師 うつやする柄し
まりうん。こでおのことざ悔よゆ打しゆつり
てつりぬめうらかぞしをきとゝ恐しめされ
ぬいつのうすさこううるんとゆめし給。げまと
ふくりかそ 抄 さうそ候
んでもさうしも。同つりうつよなりゆくう。
抄 此意乳云給所都とふかへし
そうのかしさまもあそれはそうりさくうつ
て。山のつけいをぐうさきんらうするまひぐ

ひぐらしの鳴つる人は日は
暮ぬとなきけん山の陰に
ぞきこえける　河　あかぬ哉し
ともかなしげ山ざとの
さまはおかしきやまさとぞ
しこ

時かはりて　孟　時々にかは
りて後夜中日の字
を読むなりと言
を讃一説云
かねうつもかはるも
細　不断経時とひさきよむ
僧を以十二時と番くり
かはりてとこうきひて言人
と又書かへりて居る僧
そのまゝ也

しきりてかきほにおふるなでし
このうちなびけるいろもおかしう見ゆ。
前の前栽(せんざい)の花どもは心にまかせて
みだれあひたるに、水のおといとすゞし　箋　風の音と久
げにて、山おろし心すごく、松のひゞき　箋　声ともさ
木ぶかくきこえわたされなどして、ふだん　ちもうちくなし　孟　一時づゝかはりてよむ　しく物八松のこゑ
の経よむ時かはりて、かねうちならすに　斗
たつこゑもゐかはるも、ひとつにあひて、いと　文章の趣之
たうとくきこゆ。所からのこゝろぼそ
うみなさるゝも、哀にもの思ひつゞけらる。出
給はんこゝちもなし。りしもかぢする　細　夕霧之
おとして、だらにいとたうとくよむなり　箋　頭の加持八高声なるべしと
　河　息所の物化のところ
げにいとなやましげにて、人々もそなたにつどひ　御息所のくるしみ

たつ聲もゐかはるも
抄　聲別に聞えず一人ミつかす
はるにしやうとそ不断の読経
へかはりて経読のあれそ
どれ人もおなじおとなき

山里の　細　此帖の名
とせり夕霧の哥に
八雲道にあり　孟　さたに
かはりがたきをみて
山がつの　細　二巻の也哥
心ぞらなるとは雲に
やるにかくれて夕霧
のかゝりまがきのかくれ
都のかたりとぞ云

ひて、おほかたもかゝるたびどころにあまた
まゐらざりけるに、いとゞ人ずくなにて、宮はな　孟　宮ハ落葉の宮也
がめ給へり。しめやかにて、思ふこと　夕霧の心也
もうちいでつべきをりかなと思ひゐ給へるに
霧のたゞこの軒のもとまで立ちわたれば　細　山里のさま也
まかでんかたも見えずなりゆくは、いかゞ　細　夕霧の詞也
すべきとて。
　夕
山里の哀をそふる夕霧にたちいで
ん空もなきこゝちして、ときこえ給へば　落葉
　山がつのまがきをこめて立霧も心
そらなる人はとゞめず。ほのかにきこゆる

の人をいとめでたしとて　哭
孟回発　箋　さらなん
そしくもうきさとおもえ
くろさ手まくへさや
うまれ宛あうん人とおぼゆ
めずらしく　抄　此段夕霧を
よびめさるゝのにおり
されべきしめの義で給ひ
やうでせう給　細　人ハとくめ
ざとおり従ヲぞり過ず
おのとく過儺をあまま
やうひとえうこし
つきさ給人ハ　細　なさう乃
ろうよおもうぬ男よハつ
こさうしとく　抄　ぬる男入り
つさくしりしぬ人ハゝる
ふさるしきとく

けちひよろづつゝましくよくるさ（夕霧のこと）
まどれとてぬ。ゑぬげそうしわざうれ。（細　夕霧の御身の深さ方より）
いまちハえてしどこうりの面がきハ立ち面
おぼゆるもあら侍。やしきを給。つきなれ（河　遂　日本紀）
人ハかろしこそあざやぎもてひて恋
のびあまりめぐらすらも侍のゆかしきな
給よ年比をむげにこゝろもあなおほかね（細　文の浅さ）
ぞまいぬ侍よのをりそてあふしまへるとう、
こゝはいそぐ恨めし給をとゞうしく、
てうとうれいゝへもるげ也へいふるげ（抄　夕霧の家之又命之）
さつくの内よまさうゝうおわりおりすん
やしおめぐらし給すさけるかうそら河

れつゝきのぞうしりうり
うりえくる　河　右近大夫
将監也。右近将監の叙爵
しうる　師　一説少将夕
霧ハ近衛大将也その下
の将監を近衛づかさの
将監と云ニ是しり叙
爵しうるを大夫将監
とかく、うちうちえらう
とハ叙爵せうるゝ。五
位のうらし
あのあさうりうまおかさん
抄　律師の香なうえ　師　夕
霧のおりさんとく
ふえて感のさう
赤文のさし、ようもとのハ
御修寺の為之。花香河
海抄作り。一説夕霧の
五常の意をとゞむ別
せずして小野と云ニ流
さそのまへりとゝされど

まさ物のけにもられそてまつれりといふハ
をんさひまうさ海もとさるよおぼしせさ（細　夕霧を見て人と思ての給て）
らんとおそて人とめせハれつゝされぞうよ
まうかりえきうる。むつましき一人ぞまいは（夕霧の出家之）（師　夕霧今知とまり）
まろ。亡びやうよめいまをそて。けつろしよるる
うまさつらべきこゝのお夜ごとえんあるどよ（夕霧のゆかりてに案て）（箋　護身　是も於本）
いと無るげうさと。さて今ハおやとむしう（律師の）
ん。まひとのもとうりよとありて。初夜の（今夜ハてに夕霧のよ御なりてく）（しや　初夜）（箋　龍ヒ）
おそてん。程よよのおぼうりくるよ物をんご（の一時のをとうひ給ふらんぞ）
れり也ふつてせよ。猿男ありのどのと（ハてに来つて人みて）（どのじん）
どもハいうものゝうくらん。まさ
あまたの人をそこなひてごうるよ名号

花鳥に委しく見えたれ
ば略ス 今案山城国
愛宕郡に小野八上
下あり小野也栗栖は下社領
也 寛仁二年十一月廿五日 神
宣ありて官符をなされ
しかりぬかりをのく任ちら
されどいふは此下小愛宕
郡も小野栗栖也ありそ
れとふよかりしを 略記之

せそくやうの篠ねしうらくゆべきやう
よんともりあとへしとの給へり（盃 左大臣の心へ）やう
めうべしとえてうけ給はりてさ
ちぬさそてまちいとくいもらくしそれいは（細 夕霧の詞）
まうりゆやどうり伝へ給ふまじうそしこ
のちとのりしよゆうされあとさまんおさ（弘 河海 胡案）
てもゆかし給もぢくちんとつれなくの給
み例ちくうりよなりぬしてあそれども（落葉ノ心／し律師ところのちかて）
ようぬ色とこし給ひあはれそてもある
くむしまはゆかしとこめさそてなる（落葉）
らうよあすさよるひととり給はんもさ夜
わしくいらろくらこじとしもそで中こし

しほうわかきて
細 夕霧と示の御方へ御お
わるんもつきと

内をうかゝふこともこそしつゝよ
細 御息所より文への御消息
く 落葉の宮の文へ入しをく
御ふみそへて 弘 夕霧の御
て入るるく 頭よ付
息所の御

まかすよしもくらてしりて御おくそ（夕霧の心）
こゝろくつさんよおぼりいう人のうけり
つさそいりあねまさゝ夕霧のこゝろよと（盃 夕霧の入く）
おもれくらいらくなりみちる御ど
なりおきましてとくりさうよ文（細 御せうそこつえ入くえ／落葉の心）
いひとりつけうちあてかのこゝろ
どのよおぶりつくさせ給ぞいしよ（夕霧の御心）
うあどうてひさしくめせらり御方は（落葉の）
入らそまへれどもれどそのすそろ給り
てさうどいはあるさもりさすへきうこそ（ことありかるにはころあかりなどへし）
うりそれどもひさしそえてあのやう（落葉の心をさせ）
よまめくこかりつそくへもあされていり（のとめく）

よもぎふとなりひえずこゝろくより
こそまするひるがへりとあれいとまりるて（ゆふけぶりのごとく）（くものごと）
わらくもくいえひさくるなぐらへくこさ
りめし給もねばいとあさまりうお給へ（師さるみ人この伯　私問）
らうざらけられころのやじまるんとお
きぬぐらりま呼ゆれどもぐらりこそさ（細夕霧の似く）
わらちんが人よりけまうしよりうめ
ざ海しうゆばさるへきみやハりきどなつ
渡ともおもるれぬるとし月をりされ
里めんとそいとのゞやうる海よく
りてありめくむへしし浅くるしもつを
給ことくいれ給へくともうくるとやもう（落葉のごとく）（私　女二宮のんまる花君）
くもてしゆがそくするのをやうことろけ（よ近く付れめるとロ少しくゆかりごとく）
見ゑは　の給うんとともましてぞし給
をずいとうろくわらくもうさ申す海（細夕霧の似く　孟夕の私めまし似く）
られ人もれぬらまあまりめかすさく
ちきつとらりくそ待しめ光しりなれ
をぎさうととハそうしよ冷かゆうされざく（私御ゆうてあるに御無さるるハおもしろく）
ハ冷らんざされじいらぞらゝぐまくぐけ
待らむひよし人ぬぞやさうれとのづう（堪忍のまことやとく）（我志八女二宮）
冷らんしもらめしと待らんりのどもる（其の内にもも内なる知つまきとく）
てゆかめしうけとうりそするる給（包殊くく）
めれべ呼しさらんとるまいうでつそん
うゝらるくみくしとゆかるるともうくる

らくまくらけ給る
何武うる心ハみくにぞ
られども一川もちるぬ物よ
ぞきしうる業周物語
くるうろうめへるこう
見へと孟夕うに田よむ
かくと使まるるへきに

かうまれぐとくいりやうえん
とべうちうと夕の詞く

こしとなきえまうハ
孟 藤壺一重とならべうふ
くいるるさるすとし
かうりのけぢめ人とそ
みく　毛ぜうの藤よの
つでとと志うく楽
をハうるすく衰なり
すとく

ごくらめべきうれ人どそぐりよ時のこ
志らを仰んとぐらりなりいひあひぬ
とく 弄孟同
けしきのつくさ枕へいとくうぐじける
えせぜとよの心
されげそおれぢらよるさふうるよ
うい絵つりこうじとさ人すつハいく
落葉の心
りのちくすさうこめるれど人ひさことあけ
どうどりのけぢめとこ志ゐて地ずさ
夕顔の詞く
ゐうんしそ衰なれど汁さしんひてら
こそ心のまくたちさ海みもあしさ人の
まと夕顔の心
海ありさ海のるうしうおそよなす海
めいすつるかしさはいへどこしよさ也よ
くりかとのまとひ給けりや
細 内々の御（心）…

あしうるうらら志うくさげまつうまく
のれ穂乃あくりをなまびらまけらかう
志そうく句ひみじらりおいめそらう
しげよやつうるうらら志まつう風い
とん給そうかけゆく秋のそこさむし
のねもあゆのるすく声も聲の音もひと
つよぶれてえんなう程すれべあゞわり
のあくつけ人ぶよねぶめ志めべき死の
御気色とうこしとさまぐうりうぐさ乃
月の山乃はちかきかどど光かぐうりの衰
なりる紀うぬかり志うぬ九ヶ程き
くりてハあくうれ心の月とあとしるる

孟 女二の弁と夕の心
細 夕顔の詞く
細 内格子もさうざう

細 卯空ハえこらうりとハ
時のしきうしくさハいへど
孟 ちくし 師 こしれにゆ
いはかりくろ祠しせ心の

祠よえ卯うりやうんる
どわうようりてさいい
つぐるとめつり

こぶわうのわそつけさ
孟 此乃この枕そひさう
ねあうくしきえ人まぐ

入るこの月乃山の端らう
きほど 師 此の祠よ衣
のゆそしけれいこのか
はそてよ北まして衣そ
とあり入るこの月よむえ
べし八月十五の月乃かけ
よう山里のさ海あうく
と云より

うしろめぬまで、あれぐくあさましき心や
をさなきどもこひあへじと思し給ふとも
よしなしごとやをさなき御心のひとつをもてさぐ
るをハあれりの心じらしなくてひとつれる
きみもつゝむるれわづらひにきえすぐる（細 なくなられバ我もといふのどかならずとぞ思ふる）
るしくかうよ、えらんとふどわりあぐき
らし何が世中をむげに思しらぬ
みなもわらじとよいばよきそしとめ
られぬべくうらみてはびしうすこし（孟 芝二の宮）（細 落葉の宮の御心）
めぐらす。世ちえりうかさのこゝろや
をきこゆるよ、おりく風のめつらしきにも人ざ
ありげにもひろかきたまのしうきなり

ゐげぬまで　師 世づく
ぬといふ心ゆゑあらそひこれ
ぐしきこしらへやうなき
ことに夕霧の月比の志法を述
るふるまひも人やもどき
細 夕霧の御心ふかきを
ぬこともみえぬ世なかく
恋ひするのあまりげ身にと
そしれあるまじといひて
師 なをさき人へといふか
かゝる下ざまの人ぞそのかき
春ともいふで夕霧の
やうに世づきてあれぐし
きとあさくくらひうちと
こまおわれとへ宮ハ別
もうかぐさりそとのなり
案ずるに
世中とむげに　細 柏木に宗
きこえハ世中といひ新緒
ハぬやうにもなしとく
めさまし　暁 ろうそし
くあしきて　孟 世をといふ
ようたくし夕霧のやうなく

やしなひつけ給ふにもあやしく思ひ給（細 落葉の宮の御心）
たぐひきこえしのつら紙かすひこりと
てもいとかうわざとかしき紙いかならよ
おひつまべきすなにもあらんといひてほのか
よおもれげなるいふそ
（落葉）まれのこやうき世とおもひわれけりそ
われそむ袖のぬれてらるべきの給とよ
かきれ給ひかくてつげうし思ひへりまて
ちぞひすることうつくしげなるいひ（落葉の心）
つくしきと思ひさへてにぞよあれうさ（細 夕霧の世中とみる）（細 大人の心ばへと）
うしたりとやうがくるさしつきまう（あらしぬおもてかせける）
きかく

うかうこしのつく
義 落葉の柏木にあひ
たまひしといふつく
ひとかうわさかしきといへ
うやかにいひたまへる
愚按 さらひ柏木にあて
世中といひあらそてを
まざと何といひすべきぞ
夕霧のかくおさまりし
よく夕霧のことといひ給ふを
あひんやうなるさまのかと
のかし
細 世中を
我のうや
ひけにおがしあるぬかも
あかじと夕霧のやうなる
事とそり我身の心まぎれ
あをそこべしやとえぬる
世をあさとハ柏木に係る
つぎるかへわれそふとは夕霧
のめぐく夕霧の柏木に別り
とき人世といひなしのやうは
又夕霧ようへかうハ落葉の
ほせとまれうくいかしにぬく
うさ名をとくる男人なる逃

うとりつくつくつくつよいひつる
ようさいひがめれさぬと
細 将やらうしまつく孟我
あれどぬを老世やまず
ともね柏木のまハうれる
さとタ霧のやしきうとく
くまつくすとまくるりて
仰 霧ハ霧にとゞられて
なとゞひし月の昔さち
くく猶とやりめべし

夕霧
おゝ 山寺よりのもあるぞいひつくと落葉の字あき 廿五
おかくとハ日が出ぬなとさをさずわくら
仰 今文ほ名と極楽ぞて一向り
め神の名やいうつくひさふちよ出ずり
えまもえまとくし
なりねりとて月なつきらてよいざるひ
落葉のらく
きこゆらむあさまし出がとくつうり
夕霧のく
りて夢しまへどたちうつひきしまとなり
夕霧の歌之歌 雲座よ押立まろうハあらしとく
てござらりしんひうきさんざしと取らんど
まりてとんやらうりそ夢しまへ流ゆり
あるぞいふうる くらひとけぎやうら
紫し給ほじ昔さちうすらようり月
夕雨まるくすまもくりてぞうみを出すき
進まぞきしつりさちあさきなりるりひさし

うれどもし姫君さやうらち
御くるし
これハさねさども
孟女三の宮に柏木ハまうさ
深夜までとく柏木を深
衣をざし術も出されれ
て給よろこびすれてしそ
れさへとく
めぐ海しさんの歌みて毎よ
めざましさんとい女二宮
よ柏木の律暑あり

女三の君つゆく歌わ
の形ハほどとちまくららすれば月の海
しるとへ
よむりひまやうかまちおやまうちしる
女三の依よ母く
くそすまぞうつしするりて夢しいどいへ
お 故君へ細 柏木あり
んきろすくあゆめささりこ君の流く
夕霧のく
とちうしさし出さく海ようのどや
うらう物語とぞきこへ給ふすうまよ哀の
細 柏木よハまうりと見えもへく
さふしらまよ見し出すとバうしろめ
夕霧のく
細 文の流くし
よろしくきこへ給へ流らうれしらめる
細 柏木へ
されいらくぬあざもまざとよバざりけり
ほどるがくれもく流ゆかしきうら
よとのつくりて夢きれくえされ給みて
とそれざよいとめぐ海しきうちの歌みて

さて俳諧なりしんの果の
ふかしうあり〳〵あるまく
へ梅本のまゝ世さかく女三乃
只その班に施をかゝると見え

かうつうりかわとしも
お寅りのなすうすす又三郎
巣ののつてきさるすと人乃
ふくさうんを口おしく
かわりとく
家との所のかう給いさらん
も　母まあつせらって
夕霧にうく抱ひのあひしるす
つまねうおしく又母のこそ
あひあたれうにしく婆
ま返付れしるうすとん紀
さあしくかわうさん、とく

夕霧のうへ　紀夕霧
こ海よおりてりうあのめかじきこうしなよ乃を
の夕霧ハ梅本の連枝之　細役任斗くあり
よきくあくりふかてまおしくもでかけ母なる
お夕霧も無く
どのきうさひ給ひんしくよ。すべての世乃
細朱雀法く
そあうりハさうしふもいなず。後ふもいくり
是女三宮夕霧なるで
こうしめしかと行きれんなどならすれぬ
お店一亂の事く
家うしこのはたゝろと思ひしめつくすまい
とくあおしう我らひと何よりうつりうお
りふしも。人の抱ひひいうすうん家あてどてろ
のあう給ハざらんも。つとえがまあうらく
きくあてくゝろかさるすくとかりしの給え
んもとびしりたれバおわりさてぞまいでさ
まへしやうんひかし給ふり母のとくる

らこそすりやうて
幾蒼巣の夕霧と見とて
さりくぞすやりくりと
おりして宇さて此獣部あ
らバうきくき我らどもえお
さめしとく
さっぬとくくと　細我らなろ
らと何ともなくぬるのと
らしかどしてとまうて幾
宇そ此獣部わらん時ハ
日比の夕霧にてハらもあ
るまだしさわしまあくるぬ
るすくとく向後獣部
させなりじとの男なま
うくかうしなりて
ねそゝりやせん家かぎおいて
御わびれさうゝするせ
なりくバ家のねととりし
てやかさんと我らなかうし

細夕霧の詞く
しわさおしやうしとありがりよりらけ給へらん。
細わかうしさらきさ海く　お夕霧の恋の種と向後が斗しされとく
わさ寄の宮うん所よおず成さしくバかかりしされ
よううりをとうかおりしさき海とこんくなりりて。
細向役代くうりまよりてこ
うしこうすうくいやうりつとかかりゝされかうん
まひてつとえ
こそ母のきけくゝろもえかさめあふはじ
う志くねとくくとぞしくねんらづうひも
あすくひそじびべうう。さのへらうれとく
夕霧のらい女三の法らのとけまつて又つく
いとうきろめくてわくなすれど。ゆくり
八おくれてうきうく宴同なうんく
うるあかされくろことの本くとよるうとなすね
細中あ入されつく
はくらるすれハいとおしうわかれさぞうく
細夕霧の自己らく　孟不五息く夕霧
とんそうりやきんなどかほしそ。よろ清
よあふもあくゝのかかさほどくれぎかり

とひとくらうまよくもまよ七
物ぎさつくしや　孟夕霧前
くりくて曲すくゑるべきこと
しうしく義うくを出る附
八萩の影よぬれり来え
八重しら書ともならんまり
うらし雑堪をひきて
歳楽へ拙人よく
ぬれ衣ハ　細うしろくどこし
らへて出しのくても甘やく
義歳楽へ夕霧の来まり
しハ人さうくしされども
実ちすみかれバぬれざ衣と
ハらかさり　河世くりまよ
我ぬれ衣よ命ち相ハ備る間
のきもちぬるり
うちよりぬくやうや世のふ
ゐつりてそ　事あさうれ
まやうう世ちふ躬よもそ
継る娘始めきそ寒青
よぬれ椅うぬれざ成られ
で歳楽の出ゐうく夕霧
もあん又歳楽もえむき

よしうらくれて出給ぐちうそしりあらり
夕霧
物ぎさつくしや折ぜしの壽よそ信ちつやん
河さりとうけぞゆくべき。ぬれ衣ハ殺
書よかくゐさふりり向え
え須させ給づ。うまりまうやうらうを世
給消ちてうかづつしてそれとゆゑ給づよ
このほ名のさけりしぎりりぬべうほんの
師ちうりもうさ揺ちりて
とうんかぶてよぶらちぶらうらうへんと物ぞ
とば。いそじうりそてゐすれ給
廿二
うとけゆん菜の露とうぐしそてゐ
とぬれざねとうけんとや。おふめづらしも
孟廿二の行と
ぎうしうれと。おぶかまへるさ海いじ物り
夕霧の心く

ゐのとりんりうれ
いひてきめべしゐのよりでいうりうえん
とけゆん　細ん人ハぬれ衣とよりきんしそ
まよハゐの如とし。義成の菜楽の露とまさん
ありすりるてと須へうけてえるべし
ゐきせんへよありて
細世の人よハうりてゐぞ
せわるへりそて文とさでく
しくゐうりとく　師夕霧
のゐくし人よさぐるゐり世
とハ縁ゐするりすくと文
えまさがましき揺とえ
えなむろべきさるすゐハとさる
えへし給く
うちあゐからよちてさびいきえ
おゐうに廿二のゐよ給そ
物てうん如来まうれすく
えいこさがりらんと云ひ
私てゑるく。芸も実根
ゐうちく
成よ出きせハ　孟夕霧の
疲へハ雲井とそくりて
花散里へ論りて

しうぜ河りしけるすり。とうじはんへりいうゐがく
ゐきせぐとつけてよむべし
ゐぶるを人よありて。き海ぐくよゐさけを
そしむゆすぞうりすくゆらし西め。こと
ぐくさやうあうりぐしくおしうりゐるゐ河う
しあすれバ。とうゐすゐびとひへし河
うつあゐがらりよちてさびゆのしても縁を
こぶましくやとさ海くにゐきされつくいぞ
給きちのつきけさをいと取さうしらやうの
ありさあすくひまりぬくらよ。物うしうしも
ゐづくしゆも物わして。成よ出えをハ。女菜ん
物夕霧の成ハ三条へ　物雲居え

のうらめれどおやしとどめ給ふべくなれが
六条院のひんがしの辻くよまうで給ひぬ。花ちる里の御方
まざわさぎりをなれど。ましてハこまハ お前へ人いまだ暗ゑて 細 小形の里をさどふ
いりゐし笑しやう。例のしのぬれ来りうきの なかりまうちて
かりとく。いさしめく。まだしうやまりさ 夕霧方の之
まそはぞめうう人し。海なか河なめといと
きうしうよ志をさまくれバうしの御りくるひ 細 花ちる里うやうのくしうくかいさ志をさまざかなり
つまりさうぞくなまり給れり。なあどくきより
て。お前よまり給りしうよ御かてなまりまく 師 仮氏の御前之 細 小形の人く
れど。御らん。じもされど。小はりよわさまし 夕霧の之 お 覧より夕霧の之
かうしまう給ふ。めぐ御志つうとも行りしうも
ゆかもうよ。心づきうなくて。くめとゆ前のりりうう。

給りんしうも。いとなげりしう。ぶりうとりうこ 咲 うらうらん物
とやとりけてまり給ひぬらんよしでうう
ぬおしみくもうけまうひ人のすれらひ さふうしいうて 孟移日
くれまう世なれバとのづりうて。あつせ
てべうそてろうと地かさんかひてくろうしされ
バ。人ぐありしまくれきうてし。のうさるまん。
うしとかやもうとも。いうじいきんと地用と。御息所の出まてうしとふやくもせんりうこうしとく
地やこの御中とをき面の中ふも。家へぞ 地
てずぞとひのりしろ人。ふ。ぞの人へりりき
け花。地やまうくをしらべひしきれバむりし物
給ふをあめれど。さうろこ地かされどく人ぞ 夕霧のさやうてはとろにぞしく
いるまうは陳のうよきく給ても。こしくし 御息所の之

くだすらぬゆへしあるくも
さんうけるらハ 箋 覧と自
然えうれくみをえんてま
まふたぐまうバ志ひへぞそ
きうとえ神としまりべき
とし

へくありしまに 細 何と
またきのもとあべ人の戸ゆれ
りしよ 箋 夕霧のくまう
ぬるす。文字うすのまききる
を奥まうつく。志らへ物之
地やこの御中 細 名ゆう
のあす八釈よへりくうす
そのあくらのくまれど覧
ハつのく人のたよりう吹す
めるで。うさされやせとく
ひりし物従ふをと 哢 このく
舟橋のうすをうのくらのりう
おしくんど。まう方の孫等，
まぐひく。お性をうつとよバ
きうえでうのへし

かくいへるよりこなたのうまそく給て
ひてもかうしろまじくおもひけるが女三の宮かくうとくおぼしそめけん
とかう給はとかくおもひそめしをいとかくなりぬへし

哢これは女房などのたゝずまゐの様よりしるしけるを云也 師 何の心ハ

ともかくもおぼしわかれずゆゝしくされんずごさ
よかざりしみどりひあやにそいかるかんと
ちかどらこのれなきそこのゆかしさとひ
きまもおけさを給ふるみばかりしうくて我
しげよらてしさを給はざらんもゆがけり
ますけりくきさやうかまぞ何しんなど室
えそひろげされバおやきせるまじくならむ
ききぬふくしんよりそもゝあれ
おもふつけきのさりしのおやまちよお
ひみもそどもひやりかりしみさやりさ

あるかもうきさ魂をとゞめて
箋 幕簾のおもかけさら書
の染みてゝ 師 何の事を夕顔によそへし
るらん 女の心をもよそへて夕顔に
あらさるへてゝ夕顔によそへ
近つかれるひとゝすゝし

魂しゐを 細 心あらしに魂
もわくかれてなりなり
孟 夕顔の哀く我心かくハ
我心にしくして何とくなり
なにかとくおもかけうし
袖の中にや入りにけん我
魂しゐのありさまらくなる
わかなる抱ハ 細 分を捨てい
かやうまりうんなり外
なりて抱ハ心地なり
例のなにかしさうのおつしの
あつしの程縮めさてさらゐ文
まてへおもしらふ文に絶り
よひつの文の様よハかうり
て無気さらうとみたる

きざみあかしてもやうずへくもずよしいへし
こよの程ハみかくうりみさせあれこれ
みくげあすくいとこころふうりいとそ
夕 魂しゐをつとめてさき魂とどめてさそ
我らかうしおもしろくれおかるかる抱ハ
箋 夕顔あれハ葉も数あるとく
とかくしとかくひありもりをとおもへる
もそこもやうよもかくさしものことこもん
細 夕顔の心やうかうかとくおもん乃
などいとおもひけれどもへんへえもいうも
こもぞ例のなにかしさうけさの御文みと
今夜の御文あらわれたりとも哀
あこかれとも我えもひかるけふこん
へのかしもいしおもしき我気かうう
こともりつついみかのこと のかはかりん

又坐ニとりやしまひなん
おゝそくまての名切や
とまくていぬくとゝり
いふなるへし

あざりひとり 細 律師
なれども律法阿闍梨
なるべし 孟同

あくりやう 細 業障まつ
つうしやうしてゐるなる
りのすれバ正法とゝもえく
降伏されバやもとなく

そよや此大将ハ 孟 律師の
御息所へ尋給ふ 細 おひ
ごめすふとらひ出給之

故大納言のいとよき
お 柏木とよき中にて遠
言ありしとさだへしと語
なりとくさそ秋形ひを
も吊ひよおりしことゝ

（細 夕霧の御志のほどをいへり）あはれとよつけても、おりからう哀なり
法師ばらハ、ほとけへぬれど、うかうかさまさ（細 いりせのかなし）
のこゝろしてハ、ことゝりや、ミ給はんと
おりふしも、おやうく、みじむつかしうまふ
らぬうきりへやのかどちらゆりひとぶらまよ
ことゞもうけて、さり給はざりみたく
ものゝけにわづらひ給人ハ、おもしとみれどさ（孟 邪氣ハ陰識あるまじく）
はやぐひまもありてなん覚え（細 御息所の御心の様なく）
給ひつる、日中の御かぢはてゝ、
阿闍梨ひとりとゞまりて、猶だらによ
み給ふ。よろしうおはしますよろこびて、（御息所の）
大日如来そらごとし給はずハ、などてか
くなにがしが心をいたしてつかうまつ
る法にしるしなきやうはあらん。あく（悪）（細 花鳥の説て悪業）
りやう（霊）ハしうねきやうなれど、ごうしやう
にまとはれたるはかなものなりと、こゑ（障也）
はかれていかり給ふ。いとひじりだちすく
すくしき律師にて、ゆくりもなく、そよ（孟 こゝそハ不當也）
や、この大将ハいつよりこゝにハまゐり（お 参通のこと）
かよひ給ぞと、とひきこゆ。御息所（孟 御息所の返答）
さる事も侍らず。故大納言のいとよき中にて、（柏木事）
かたらひつけ給へる心たがへじと、此年比（夕霧中の心）
さるべき事につけて、いとあやしくなん
かたらひものし給ふも、かくふりはへ

らふとてとぶらひにとてたちより給へ
りけれバかたじけなく侍りときこえさ
せし給ふぞ。あなかたはらいたやなにがしにかくさう 細法しの詞の初也
べきこともあらず。けさごやにまう
のぼりつるにかのにしのつまどよりいと
うるはしきをとこの出給へるをきりふか
くて。なにがしハえみわき奉らざり 抄律師の自称 孟見わかぬ也
つるをこの法しばらなん大将殿の出給ふなり 夕霧也
けりよべも御車をかへしてとまり給ひに
けるとくちぐ申つるげにいとかうばし
きかのみちて。かしらいたきまであり
つれバげにさなりけりと思ひあはせ

侍ぬる。つねにいとかうばしうものし給ふ君 細大切にもあらぬ也 河暁日 孟不可然よしなり
このこといとせちにもあらぬことなり
まへ人ハいとうそくにものし給ふめり
なにがしらも。わらはにものし給ひし時よりかの君の 夕霧の也
御ためのことハ修法をなん故大宮の 細夕霧の祖母也
のたまひつけたりしかバ一かうにさるべき イ向
こと。今にうけ給はる所なれどいとやく 箋孟
なし。ほんさいつようものし給ふさる時に 益なく 河本妻 細雲井の雁也
あへるぞうるいにていとやんごとなし。わか 孟雲井雁の子達也 細廿三之
君たちハ七八人になり給ぬ。え皇女の
君おしたまはじ。また女人のあしき身を 孟雲井雁をおしたまはじ也
うけ長夜のやみにまどふハたゞかやうの

人ハいとうそくに
抄夕霧をほめたる也

ぞうるい 河族類 細ぞう
るいハ親類おほく族類也
女人のあしき身をうけ
箋女人ハ地獄の使と
いへり
長夜のやみにまどふハ
孟たゞかやうのつみによりて
律師詞也

抄 ぬせの冥闇なるへし

孟 夕顔の事ゆへ立ともあり
まつことぬせのいとほしさ
てまかりまかりやとえ
きくまうに抱しあふ人を
く給ふめい給ふなり
夕顔八五人なれ乱れ
まかりのいわしとも不思
儀のあすと律師まいれ
かわりしくゆひあうり

の罪なり
つきよ、かりそめにかくしもしくひとを
とかく抱きふ人のれいかりおもふるば。
すゞろにしもかへりきさん。かくとくう
けひかしたえてしらかりてことにひとひ
くるそこばへいとわやまうこしなりさう
まかりそしとさみもえ給ふぬ人なり。
しかりけらのまでひめしきべらかやど
みそ對面さんともすんおぼしさらに海
まへまゐることてまごゝろのひとをさや
うちくとありすみるやおもん。抱
かいともかくやみすへうゆ抱し
かのんともし。地がめの給ふかし。ふれから

細 抱えんしるしのこと　河 専之　兼引　せぬのこと　細 河 惟光の何 抄 不審なるよし　夕顔八五人　されがし　河 惟光の抱つるしるし　師なるわざよか　夕顔の方体とてく　細 夕顔のことく　河 惟光の心中よ

うちのされたりまかりけんハおもくし
御心ゆるされ給ふまかれ
まるすいわしとうち
けしきなし

まさうつくりやまさんさ、ぬれ
いさくはおりくるれど人のためし海の
いとかどくしかり。わがうちよんのそ
まりわんこといれぶこともそがうつ
ざらのまつるま。さけやさくこゝろゆかされ
ぬことハおもしどうらとけうるぞりし人
ざくなみやくおもそすかるしこさ人ぞひ
いかりや志給ひんと地わもつもしくうち
ぬるのうちよ。小か給ふの恋とめそかくこと
なんさくつかいかなりしこそぞ。みどくを
のれかばさゆんかくみんとはさうをま海
えざりしさしもわくじとハおなみがし

孟 夕顔の術と云く　河 惟光　細 省略之曉　くわしくハ又省略の心もあり　女三の段　さまをし　夕顔の方をさく　あさりのこと　河 惟光の同文通　さはへしくわりしとハとて　よもさえわししと云ひすへく向ぞとのこと

いとかーくれど
先かねえらんよ女二の道
をあいしと聞しかれど母
へやしく
けさの内文のくハしき家
もかのうよ　かきりげな
さなの作実なりけるさき
さあとやへし師家も
おのうよと八家よえを
むじなと見と雲国よ
のあのうさ申のるかか
へし

との給へハいとおかしきれどおほしやうを
ちじめかりしハしうとこそ申。けしきろは
文のみちハしきぶも内の給よの給をせつ
みやうるなど申し。とし比まびりて給
けつこうろのうち浅ましきしきんとぞ
かりしに給ふんきがくろうかいありて
かんおりもあそく出給めるとぞ人ハいつま（夕霧の父）
申しかくるようと申しと八こひもようぞ。（律師のくろうしとハおかねをひらくてえ）
母びて人のきうそくろうとお。すのこと乃給（細ニ文章生之）
かぞいとうくらあしとかがきとよ。源氏
ろくとちがれおぬ。ごとかもいとゞくかか（細おかねハ家のさ申と人ぞすうえ）
しくろのめありのまくよそくしつし

まうしハましてるで
養子ちらて おどろき
よさよりすとして
ならくの位心ざうくうかえ
おとも　故実の家なれば
人よいろへ申けづくしとゑ

んぐりしさハんうきいとど出ほしまるか
らんとくやまうおもひぬくろ。さくうじえ
うしてかんとくふか門よりかまさこやう
よろこしるきど。そてもなくてもさば（細文章生の給く）
かりよ。なみのかうひもなくうかかうよ（養つるのうらとけろ師と云ふ）
人よろく給ろんてそいさとうそじくれ。ら（文將の安よ）
くのはんぐくうかかいすとをもぢくまて
いひつかわうしだう。ようしぬわるべ（あり々りあといひし法師家へ）
あぢハまさよいひのこしてんや。人よハ
いつよいひかくかひ。さとめくぬつとく
いかべさまくかくん。まくくろろゆさあきかり（女房のもとつくろくくてとの心）
ぎりしも。家よさふるひてとと　えろ（是本のさ申）

をとこゝろそうしやましんと
細此丈を何ともおそれずさ
くしらしさきとく
かうそうして物からぬ
細此から涙ありとて今て
あまこへ此おわれとく孟此
息亦の身にあるは時女二まれ
出あれとく
そこあさんまうろへられど
義此息亦の方から立て来
べられどもく病中にれを
枝さらし用とこあら人を
かんしより
志ろうさん閑えさせ給ともら
来る孟かね女二へ此おあれと
つかりしく師よりの給へ
さようしたりと申して。
夕霧のうちを尋ねまふと
ハヤしまれく

まひやしゞす。いとくるしげなるはらくよ。稲
と笑しやどらてさられバいらくおかしげなり。〔孟女二を母系の人と〕
なさらりそてなしやのしんと物用いさるなま。
まげかうしうらぐ志もさは名のうらすべ〔孟柏といひ夕霧とあらくとく〕
き絞をどろうなし此物かしすげなるうらもと〔此息亦の娘〕
うしりの物ぶゆるひまするよ。けうらしせぬべく
こそしよ。そあるべ来りらべられどもこ
くべうをあるでなん。なましぞひさしう
姫おかららそやと。凌とうけてのまふまへ〔かね高女〕
つらて志ろうさん。やましさを給とぞろうる。〔二へ来て之〕
まそうり給うんとそて此ひさいうこのめ何かる〔蔑衆の之〕〔此凌のさ面え〕
れさう。ひきつくりひ。やとく人の此ぞ行こう〔妹もんの名称え〕

物をいとくしう
細わしの家此のかたれぬ
へようこのぶうく

びょうきくへなどし給ても。ところよもえらう
どい給もずこの人々をいつまよ物ふらん。〔お蔑宗の此ら申之孟かねあどもいふぶらんとく〕
なぐさえちり給ひぞ。後まいかうちをなを給〔かた息亦の娘ちなうそこ〕
るあんまつれなくてましいるを物得〔細女文の此んそ〕
しおいちんもつとうやづしくれバゑ
かしまぬからのいそうじうるやましさう
れ。やがそすよりぬさ園にもありあばいと〔お蔑宗の娘〕
めやもとりあくそ。あしのけのくずろ〔細脚の気之孟気のあらるさ之〕
さらうすと。そしくぞさせまふ物をとい〔按摩させのふるるもし〕〔若まての泥〕
とうかしうさあくよ物かそふけげぞ〔かね高娘義之へは此息亦之細此息亦我の事をもとまり〕
あぐりけりかね。うへまこの此らと渇ろ
めうしやましげりへしそとんとりれいる。

もろしまさへて
あまさうじハよしてる
どいひしるべし
さやうよりとあ　孟　御息所
の為あまで我戸つゝとれ
なるやうに右師らしかね
がよし
ろげいあつゝそしきハ
細　よみとわ此る事に文歎
ころへあふよしとゞの
うしろく
まらくいふひなく
箋　夕霧ようもトの人故
よ又名のあるすおもてと
くされハ夕霧のるすハ如
し歴つてつもあれどそ
れも悟くさるすとハか
がよく
細　皇女などハ一人よだに
みえうりよ必ぬるさきき人

御息所のく
しことゞもゝせしらせ給へれバ、おわり參
あさりのまへにねがひなど之
て侍そうらむべし　浊沉め中
あくまでさせで、ゐひつるじのうこめバ
うりをうん。ぞこしとをへろくけざや
うまきてしさせつゐけしさゝうようすめ
きてしさせ給ひぐ。物すでさ侮よ時のしさせ
あの子の泥
あへとりとあゝげいあつゝ気色ハそこく
細　女宮の御心を
細　柏木
いぞくもぞ。されだにいとまびしくそ。ゆの
渕之
よの給ひぬ。御枕よう志づくぞあうころ
の事あもんをつくしおひて
ことよのことをわくるぞ。身のきそとさよ為
宮をあしよう。つきじう物をのそきうを
細　夕霧之
さそまゐらして。いけようひなく志をひつぐ
けいそこのひどいへうしてもやまてぞ。とく

よのは夕霧のるすさへいでき
てハとこへ　箋　細　如此之　又　異　箋二
云人のことにとハ人言之。人の
いひすしにようて身にそう
めくさ名をとてささへらよ
とくらし人ハいひるまたれ
かうさ名のあれバとおぼし　歴
るうへハあれどかゞうかるき
皇女るどのうくまでも夕
山のやうハ有じと夕霧の宿
世にくわづことと之。いうるる名と
くさましなとく白と切て
すくせうあらしてとのふに
かけてうりし此箋も猶うに
中のめりごめ　眠　寝殿
ふどのうちにくべぬり
まれて妻戸をさそく
調度などをくれく帳養
なるよわしもぞ悪ひろ
道のへく
つくのさわうおやまるだ
孟　御息所の病中ふも礼
箋　とりして　おきあが

いひくづしひいぞんも。いとぐるしうて
ぐずしうくべう。よふうりよ此御き。まいらく
此段箋細と咲と東説有り
いひつひなく。ひとるのことるまそ。いくら
名をとろざゞ侮しる。どもそうし物御すぐ
さむらひさハあれど。かうぐうよありめる
うききへの。くまでもむざくろよ人のこと
孟　重く御出あれハ又御息所より
ありやうハあらじうしとさとく。とうく物が
御屈又苦　地
しらて。夕つかさぞ物はとうしてせあへ
御使あり
細　閑居より渡りまつり
御此所と彼方とお
とあれバ中のぬりごめの戸あけあはせを
後よ戸わうとめそえ之
御息所のこととぞ之
てうらりあへ参らるうしされとちやつめと。
をのあるすうぢぞうしとまりしつさゆのし
給へるのさ。御ようあやまりす。物かさこあが

まして女房を崇敬するは

このかうこうだうり
一日不見如三月 毛詩
のちかうかうにしも 細来世
の夢云ハ[illegible]歌
よハ一世の契とちの[illegible]
[illegible]世よハ[illegible]ひ
[illegible]母と[illegible]
やま[illegible]あがわれるん
[illegible]奇よう

里のかく〳〵いとこまごりがうくかれハ主
よくせ話をしぐるしうてるんごのかり
り三日づりにもましくざりこる[illegible]どの年
月のこころすうもうかハいとまりたるく
るんのちかるすしにまと對面の[illegible]べきさ
めも[illegible]ざめり文めぐり気かうともうひ
やハ[illegible]べき[illegible]べうゞ時のきまよへてくり
ぬべき世中をおれぢらまるしひ[illegible]
もうやしきまでるんるどもすと[illegible]
りの[illegible]しうとうあつかむがさうれ
ばきくしまふことわすくてこまり[illegible]も
のつ[illegible]よ[illegible]

抱てことをいてかう 細文の
[illegible]を[illegible]息子のゆりひ

いうかうしうてまとひき
こしあへ[illegible]
孟[illegible]やくうえともの
恥しまかごよと母君の
らへ

うのかひさはやぐべきかもかくねばこち
うとのことみがみすよいひとくあしうるく
いうかうしうともとひさくて[illegible]
[illegible]ぐうまでいそぐさ気[illegible]
みごころすまで[illegible]のきう
めさずとさてますとうしてりまう
あびるすとしるどしのへどふれまくもあ
らばくはらのしろ[illegible]
ねもうしあさ[illegible]こり文[illegible]
[illegible]人しもとりられく[illegible]
かねのあまくて文ありとうふぞ[illegible]
まびとやかね文いとうり[illegible]

人あれこくおかし 細 夕霧
御息所ものかくしの御息所
のもの中にいとうく御さし
よりく右こ給まへとし
猶 此は夕霧のおかしう
べゆかんとおもふ宗の給
まゝし

うちつけにとよろしくさふらふとひ給へ人
まてとおかしきけはひれんもそひて心こよ
まらうとし給ぞるよ。ことおくねるあり
と思やすと。心さはぐしていでその心え
るばかし給へ。おほかし。人の心なる給ふまよ
いひするとて人へいひこと思ひうそこるよ
ごよからぬぼとも。さりしものへ
くなくてそわくめくうろか心てこゝ
よはくうしひまぞ。ためおもしまとるん
こそうれしき。あひるとあまりいふにこそ
るべしいそめしましとくるしかれども
いかさまにもかゝるの給ふことをも

すひろきあま人こと夜
哭御あるおくハ木く
おそくしも御哀まるへし
人目をうてもあらん
あまらさる哀べしと宮
まとそめ君た 御息の
やしき御心して御息所の
れにせ給ふべし

さくらに 細 夕霧と
ひ給ぞらうて御息所
さるべし 夕霧
ときもとおもしへ
かくはゝとおもにて
いうくく人の名前
くしの給ふかれの名を
らしくもんとおかしめ
さるべく御心
いけまうしく
ふたりけゆよ 御息の
よ給まてくらしとげ給
（主くくれ）給ふ御息の
ありて山門の流よつて
人あるべく給はせひ
まゝするべし

らへいとくこそ ちく ひとつゝとつとむ
まめ人がれ
さくらはあさくぞそん山林のる
かれての給ひてこそそひとてくるしき
も思はれども。こそ給ひて。この御かたに
をしげかやるかなしきこともあつぞめざ
ましげまらしかとよこうしひとつまふ
るさ給いしといろいとお思ひとうんの心に
けにてうぞ御のおもそもあかし時いとう
しとさひしうど。お思ふこのりそあま
いはくるよふ人るかしくべくるてこう
ゐくしあらうそそあすくこりしされよ

夕ぐれのそらを　抄 御息
所へ人よる夕霧の折とみえん
とみかしてくらの折とみえと
とまくて此うち云事すく
とかくひまなくまうでくる
細 抄 言は女宮は息所の御
方にはうけまぎす　とかく　孟 女
二の宮出の方ちれの文られは
御かへりそそかせとそくの
うしせどもはてちゆ
くのやかげは御息所のし
ぞさく
とこゝへしえかくし世々も過
御病のよ猶さくれなる
女二宮記一段さくらの宿
しくさまん　義まかくし
の人とい人のりそくやささ

よゝとゆうぐれのしとあれのさし　やん　孟 雲居雁
（のかゝりの事と御息所のなく）のやうにのふひの給かんしとそひし
こ給ふをいうの給ひ気色とくまと
んとくらのきこえらくし　やうつ
給ゆくし　まるりておやしきをこゑつかひ
とのやうによさうまふしものりけるなり
まそ給ふとうくひよまさうのへるなる
みくそくのうしきそ出れどいとそれく
にうしぬさ海よりのし給ふれいとそのえ
まうしひてらん
と言うへしまはいて御きこといでとそ

ひま無かれば女二の宮の
かたとしこ一段つりとい
り　夕霧の今宵おとんせ
細　返ござるをくろ帰るか
両抄のけのくみ山
細抄の言ものまゝてゆめて
ともみんといふことかり
かくおもひ八由おもまと
まり
夕霧とも宿ならせ給ね
細抄のけときまされて　孟 ある
ふりくまてく　孟 抄のけい
うちこのられいのさえ
とく
ちへよりの御ひさね
て
御代よいらへよりへど人
よいそゐまゐ事つまとえ

さていとひさしうなりてまそかくお給
ぬうまくにいとうくらしけり給ふ御こと
のけのさめのけのやしくしんでおひさえ
ぐ例のぐんおりかゞりいとえはじう
のこゝろえとゞハ給はるゝせ給ひとんで
女ゆれど御身のうささまくよとられ中で
じと世御をハけとそひまくりなる君へ
このひとつとより三条殿よおかりけれ
ひこしひ立くりまうそ給ひんよこし
ときこえまよぎこうよことくゞるしう
まどれんじまそいとゐるくとしびのこて
ありしまさうも　ちへよりのちひきる

えりしもうゑ暁川寄と
うるさ

けさうびとの文のまなう
孟 是前うれど鏡読よ
てハかしどとうひうらまを
なぞくしの流さ海や
は貞人のやうるうとく
孟 凡人のことしとくこ
なりて夕暮のはなく
く月まぞふうあるう
えしさ 抄夕暮の舞月
ま清てあるうとのま
ハ流人かのひとく夕暮こ
そ雲升房とあるつきを
うくうりてうらうなうま

てなげらる絡。ふのうしさハうろ涙あるらこれそし
さ月のさてぞころやましとぞてねまん
るまさしねやうあくゑを逢りてあそび
まそうりつゞろひらのおきしようし
まうじるさうほじまぞこの流ろへり
りてまわれとうれいふとあしわ多
のあしのやうるれバとふとくさう海
かぞばとるあぶしらうるうしそて絡。
女ゑりの満さうやうるれどいてそくろ
けるてるひうりてはらえそうらうりを絡
いおさましうこはいつま三絡ぞ。あるけし
しじ。六条のおんぐしのらへ乃渡し入かり。

けさ風とこりてるやましげふしあつと
流のおまんまぞてふつ月じ。まささも海
うでもてわりわれバいとおしさまいまの
海いりまと時のしらうつちり。そまへよ。
けさうびうりつとのさ海なそてもな
なくしの流さ海や。舞。月まそへて。いさ
うあなつり絡てそられさくれ。あうんと
ころとむけまさうじ絡ゐねうしおうう
めきそ。おしくゞあみえひろしろひあく
ねじふすずまりてとしてぞもあへつぞし
月まそふう禾れつうりしさへれこころなう
ひる人らうりとぞうらりくらうはしずら

夕霧の実ハ同しうちうてこれ
ときくらまえぶらんて雲井
の戯れよりひまとつて
そはともうこもおしん
義 夕霧の衣きぐふびひ
の居児ハ雑余とく 孟それ
いともかれとるふんく

多るのせうぐくのかめ 何 雁の
もくふハ雄大ハ雌 鳴鳥
蒼鶬鳥ニ雁とかけり 兵六
おごろう男ハよけくらうまた
とくてり 義 兒鶉ハ鷹雄也
秘 鷹鵲也 何 多るのせうる
とそくの雁とふくて
あまくも中に 細 あまき
多さ中まそてまぐれまう
こして雁のうけとく
孟 三千寵愛在二一身一

えみまよくぐりて、まろやうまおろしきあ
しその居へハ、ろうひてさはとゝもく
とおもふに、よのつるのくしやまさおろしし
類おじとく
よろしうるゐぬうちのこれ、くまうよ
うさるくひら川面とまうとくて、りの衣
ぢしう、鳥のせうやうのもみぢくやうやう
えいゝまへまうふらん、さうらくさうしこ南
よまりしれ給ハ流るゝめみとしけうしん
や、おもふさうの中よ、行さはまさりしるるる
そぢめそしさうこそごしるその山がしもこく
おみて、わがらもう衣、うつがく、花
しきこしも衣るゝすらりくしぶし

扨こゝろのかうかゝめりしまのり
そん 何 くゝや姉と竹れ
の翁のむらうららう所、
一説ニ韓詩外傳ニ守株
伺見とおうすれ衣竹
衣翁くろやびせのすを
古おまよ幽せり、それハま
婦のうりよおうむこうに
わひりみえす別 枕て為
ぞくいえへかあしん 愚蒙
よ因し男のおうず さと言
ま恭れバいづくにてうく
しくきう面さうりう
あるあらんとく
ちうめちへろうしや
細 かうらう抱こそとうの
呉 雲井居ハ二十夕霧ハ七 戈九
愚案 此七の字もの字と書誤
れるか 師 雲井居の事ぞとすうす
と定すつく
るゐてより 細 かへるゐてうる
つくさやへよあうつきぞ
おくうまねとむりくみす
孙 師 夕霧の父君よ餓

くゆうあのあまかしまのりれんやうに、
ゆれまどひされバいぞくちおしきい
づこのえへのおかんと、さミすかよ此文の乃
しきみくいそこつりえゝんのくゝゝそ、わざ
ひさこやのへぞいとよわひやうよこうさ
らひて抱のをへくしさうつし出すやおぎ
ありおるへろうしや、ひといひまめいしく
ひゝりうはまうの気色のすくさまじいさも
こゝろならぞてうらよれゐうとおれハ、ひとる
へくうしきさうゝゐてからすくうう給ふとして
とうくち給もよくしもあうく、見ぬひにいうよ
の如来わろぞとくえ
とゆかむそえうりよハ何ぞすりうらおらんいとし

と宮へもはなをとつたり
持まり　お口きき
ありんのうへし
ら人おう今く乳母さと
とおもうて宮よるおうくや
うかりの袖　河大捕乳母
う六位をくせかけ　いひへ
るし　細らとうくるての
おつく

つる。おあつべきこしく
細流よいあつべきこするる
まかさのみあつぐひさ
てそうし

うくてあか雨そゝぐの袖うるゝくもは
りのさくしきへてすり人ぞあつべきおや
しくりしうりそうやへゆうさぬぞり。
すそゝのみどりの袖のなごりおなづくさく
しさらよこしつけてりそうしなきん
おゝ今こ夜を弁と夕霧と隔てく
らんとあつやしく
そふやう。あかあや。文ゝくとふくとそとし
ざも須のめくめりあいあつさ二人の流るあ
細　金三文の恨ひと云ふうる
あもいとあしうなしのさまへとつるよ
あつへさこく地かをはざるよ。あつうか
細　雲井の局の小袖と六位をくせといひしゝ
ワす。大備のあれいつとらうしとをそ。
りのもさくして。とうくいひおろひて。
雲井の局の彼文をとらくさく
このれにはひさうくし語つれば。せめて
夕霧のゝ
細　秋築殿之
柳　雲井局　夕霧扇子
もあきりそうて。つれなくゆかいのごうりう
めれバむすぶのそしうそいそとりてしが
お　脇子どのさんぐ流
なとしゝやをそ京の流文なりかなまゞと
ありつくんとめをあふれ出づしますわ。
雲井之
女君の〇をきくるまゞべのおかけしのお
夕霧のゝ
さなどさうけすてさぐりあへどなす。
くしあへらん御どをなげのべいてとこそ
ろやまりくて恨めれどとこよもわくさ
柳　雲井局のさ局く
語つず。女なるこへ立ちへらよゆどうつされて。
細　夕霧只こころゝそ恨さくるやうにも言ふ
わさり出語まぞ。我もいまはさきあやう
みくじろげようぐひまでこえまつうけ
雲井のゝ
語らず。女はくりとめんとともあへらぬ

つあうのあつべきこしく
細流よいあつべきこするれば
さのこあんさうと　唯夕霧
のゝ
ひるらしつまで　はゝ人よあい
ん月のなさき夜ぞいひを
まそひさへしをまた大なん
やけさんり小町
くりとめんとも云ひまへ
らぬをそ　お　夕霧の文
とおろかりよりとめぬ

ねよ小家がちの人とハ
かりそめのく

人のゆくへの定めもなき
ことよ又ぬかしらバ
孟子なるあるべきことを
又まほどとよりぞ文うせき
るしいへバ新しきなると
ものなく

いとゞげにけうとげなりけりと。
うろかもいれバあふぎのあそびてあそび。
あかつきかりすくあそび給ふ文まうて
すこひるまでさ給ぐよいとあはてし。
ちかきおちどもひとりひとりさぶらへば
しらさのことも思ふ給つるで。惟光
るまとおぼしく給ふらば。しとよろしく中の人
とおぼさるゝ人のゆくへの定めもなき
ことよとずなよしりば。されぬさ定めさるん
ば。さらしてぞみとどまりかへしおど。
おひきずれなかされもくれどしおらるど
しての。じるやかりけりひつしらの。

らひてじ人のゆくへにするばしらさ。しお
やしうさて定めでぞふもとよりひとに
あくしきやましくて六条わたりのま
いるまじきれバ。おとゞろこそハむしめかすよ
ぶりあるれ人よの給がいとしさうりけれ
まぜ。かゝへそこが定めしうてぞりと。
さゝ定めしうてぞのことをぞびうけ給はる。
一夜の深山風にあやまちまてるなやま
しさまりと。おもしさやきのよりくち
えくとくまくうしとさうて給いぞこのひ
ぞしとれつるよの給ぞ。なよの御うしさ
やうなろ。世人にまさらに給ふそきく

夕顔の心を光源氏に問く
白きある黒きをふてもは思ひ立ちて
これかう
まうかうて
細 女文のなく
夕顔の気色の位となるき
雲井雁の詞に
細 夕顔の詞に
師 かこつけし
細 夕顔と世の位なこの人をそにたのむ給ひそとを
夕顔のこゝろ
惟光の
小君へのつゝ
彼文又書きしひやうんもこ
雲井雁

一夜の深山風にあやまち
まうかるやまひしさ
細 夕顔とふみかすて心よあり
御文物がやまりうて
おるどに三条の上あざやか
て一条から入よりてこ
やまと風とそりもらさ
義 小路の山風と引て
なやましさとの人と云
らく

かの河ハあやしくさすかの心あ
とくのおもて
毀人とも夕霧ハまめ人
なれどもやうよの事を
さらんと夕霧の詞也

ひかしの事をよそへてさ
抄 是ハ山中を一入云
ひやうしびよにおかせし
時日ぐらしかほしきす
うち

いふなりそしおかれおさん
抄 秋よりハひとひ長へども
しべの文どもみちゆバ文
このりようりるさ海く
思彼女を何しうしろ
こんぜし夕霧のさまく

まづしかれ。この女房(細にてうかゞふ人是也)うちとけ河をあ
やしきまめ御どうくの縁よ何く思しむ
らんりのとしうちかれどよひなし
てその文よいづくとのでまへど。(雲井のやぶくし)とみすも
(文どもの御縁ねく)ひろさ御縁りね。程よ。(夕霧のく)御縁なすと思して。
ちくしみしまする程よ夢よなりひぐし
しのこ見よ御ところそ。山のかげいうよ
うりみさうりかしんおさもしや。ならて(小野へおやせし)
(ねすよおやしすらえ[illegible]おかみねく)のかみしおどぶつよといひとおもくてくず
ちくしどうほよきぐりとしきりていまよ
あしてよかとりおきんとあずめおりす
(おかゆうし)のうくのすらしおびりくらすこ
かくよひさおげまうれば(孟 文のはかく)まさしつさ
こまへるなりうりと。姫しうも御ど海
しうと御ぐゆのよぶら思ひて三縁にう
みぐうしきこしきんまけらぢぬつかれて
一夜のこと縁みおりてさら縁なりし御が
そうよ。いとおもうみぐうしうよべてずよいう
(給ふのひさんとく)よあひありし縁なんぞ今までふさと(文を見ます)
(つうせさうるすうえく)ずうよと。いさんうさすく御かね。いとさうし
(おゆ息所の御ふりのさ海をいうく)げよいふかひなすくきさてまぎうつしまへる
さ海みく。御かりけよあおまりてやく。(太宰よ思ひのかうてものかすよハおやしとく)
くりきすへ。つらんつれなくてこしもひの
あけつらんと。いつべきうこのなげきハ。女(孟 雲ゐる)

くりぐうしきてく
細 女郎花の哥おかえて。(孟花は)息所の御ことにすよ一夜斗の
宿とかりんとあるハ
一夜のことどもゆかりて
孟 さて八一夜とるかくう
と知られぬかくもみぐうし花こ
抄 みかくと八おきなまへと
おぼすうとく

れなくてこしもひのかけつらん
秋とて下給ふよべきこよゆう
されバつれなくておかけて
んと小将をおひやりきま
らく

あるくして　河あなかしこ
よろつにつけての給ふ　細心
のおさなくしくされたる之
哭聲箋わさへと流へ一
明　輿かうしてやはらかくえ。
雲井居を雅意にまかせ
てきかるゆへと我かやま
らと夕霧の名のとく
かん日　河　坎日　花九坎
日不可出行云々凡諸事
慎之日也
うちとけたまふ事と
咲[illegible]いましていかにまかりたらん
との心也へのなかなかに
くるしの詞
このたよりめざらん
細　一夜の枕のすへ　孟一夜
ハかりの宿と　かりそんと
御息の[illegible]によりかへりて

清濁両説　ぞいとつらう心うき。すゞろにかくあだへかくして。いでやわがならはしぞやと。さまざまに身もつらく。すべてなきぬべきこゝちし給ふ。やがていでたち給はんとするを。心やすくたいめんもあらざらんものから。人もかくの給ふ。いかならん。かん日にもありけるを。もしたまさかに思ひゆるし給はゞあしからん。猶よからんことをこそと。うるはしき心に思して。まづこの御返りをきこえ給ふ。いとめづらかなる御せうそこを。かたがたうれしう見給ふるに。このとがめをなん。いかにきこしめしたる事にか

孟　夕の我をかりしを見て居の雅意に任せて
孟　御歌へ気を[illegible]
細　[illegible]
細　御息所ハ[illegible]八坎日なれば[illegible]
孟　女二の宮
孟　[illegible]
細　夕霧の[illegible]

秋の野の　細　実なきことゝ
こふかりしげりて枕
ゆひしるハすまじきと
孟同義　抄小野への歌の
草の義をとかしらども
枕むすびてげにとも
[illegible]
[illegible]　師　ひたやこもりは無音
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
つらくおぼえされども
[illegible]　ヒタヤゴモリ
[illegible]
[illegible]

夕霧
秋の野の草のしげみはわけしかど
かりねの枕むすびやはせし
師説　抄説　両義

あきらめきこえさするもあやなけれど。よべのつみはひたやごもりにや。とあり。宮にはいとおほくきこえ給ひて。みまやにあしとき御馬にうつしをきて。一夜の大夫をぞ奉れ給ふ。よべより六条院にさぶらひて。たゞいまなんまかでつるといへとて。いふべきやうさゝめきをしへ給ふ。かしこにはよべもつれなく見え給ひし御けしきを。しのびあへで。後のきこえをもつゝみあへずうらみきこえ給ひしを。その御かへりをだに見えず。けふのくれ

イ二ナシ
孟　女二の宮
河　駿足馬
抄　夕霧の小野へおはせぬ様を[illegible]
孟　夕の[illegible]
抄　小野の[illegible]　孟同
御息所の心
御息所[illegible]

源氏の思ふにも猶をくれ給ふをは源氏を思つめたる
故の事也 細 夫木の方より文かくるをいひしらずやはらかなる也 孟 女二
のけしきあやしきかくへ出て世の事も不快成もつれしけなき也

じとも我かきりなく思べき
こと也れど 孟 女二の心
なり夕㒵の不急へ何とも思
ふはく 哢 実する夕霧が
いしきもかきりなきにて

あやしうあまたりまらうこ
孟 実のあかりつつと河息
の君とりなれなどもあれ
はおきしめかたく女二の心
ひすかく
源氏の心ぞかし思ふべきりける
細 河息不のたく夕霧なる
源氏ひとしきつゞきとく
抄 夕霧をおもふに物末乃
心さまも夕霧のさま也

もそねらむといかならむのたまふ
何とつれなきさ夕霧の心かなと
以の不亡りたなと
いそをすれどあさましう心もとなくおぼして
孟 河息不の心
まうしらつ河にうちいとつらき
お河息不の抱え給也
やをまふ中々さうしなのれしころの
細 女二宮は何とも覚さぬ也
べこのうとをこよなうしとも地しど
るべきことしすけきばかり覚しぬ人よ
うちとけ物しなき御とどしらて
孟 夕霧にかくれしと女二の心
ぢかうそくちなしなれいとしと地がい
夕霧の書へさしてとひ入
ゆかねとも
しなまぬとうくいふじう知がいひとあ
河息不のかたく知りころを女
二の河心
さおりたうかりおもふさくらめそうしぬ
抄 落葉の御なくてかたしくおぼつかな
うちうくてまいりしもぬらしいへる
細 河息不の心
氣色こと語とりとへかなしう抱をいとく
落葉の心
物がしそふべりけることすけりむつ
細 河息不の気まやあふ頼
とふさがりてかしこれば今々なまじうく
しききとへこはしけへどつねに
落葉の夕霧に気色ふるをいへる趣
くをとはいひるべからうをにもきます
てひとのけしき給をひのくづきこころとぞと
久しくべきよりいあるねど今ものるるを
河息不のもの給とそ
さうしもへひそるしぬ身みがくしぬと
お河息不の秋を思ひとりて
いうけさくてこきしつうといはば
みずとも覚えうりせ中のとゞ猶かさ
ざ海のかたちとも覚しあどりめぐべき河

さる御ことにいひかけてつゝしき
ほんをかくしてのまゝなり
おち夕霧のさかなどとさふ
まことにうけたまはくつゝしきは
御ハかしくともさうにも今をこ
しれ息所の命をもうけ
とぶらふことゝ

人のありとあるへ
からく　何忠臣不事二
君二貞女不更二夫ヲ

どよことなりとさこつうこくしてそなたさ御ハ　女宮の御こころのやく
しろやもくことさきなりつれなる御いと
いひかけてつゝしき心とともにのたまうなる
こしさひきぶれ給ふよし御あたりしこの命
をとくめすほしうらやんでへたつまて
うしろしくなりぬる女のひとよりすかり
とうらあめしうしつくなくしもつけさわ
ざなりとてまして我は男もはさきより　貞女なれば也
なほうけなくへのちうづき此ゆへさよ　細 柏木よ道なひしなりもうらむまつそとく
をわしめをむの御うよううろもつゝぬ
れなきとつかれとなまりるやうしらど　異 朱雀院也
さうべきはなくせよしれてハ御しりめ

みかそらもとりとら　御男の
うきを世のうさとのと悔れ
んいうよ大宅くろうらうん
愚　落葉の宮はさいなへさき
ろすを雅よりくらんやう
なさくとく
よその浮名をとて
異 は息所の給なり夕霧
の女二宮へ通ひのなぐさそ
の名のくらんなりハカなり
よのつゝよ恕なりまゝら
ぞとく
こまなり佳こうさき人の
細 夕霧は二秋三秋とよ
らひ給へぶりなすく孟夕の

まりてにえしすびさこのちく給　師 父は大臣
をゆるひまづさうしさあり(しよと
孟 息所のめのとハさ給れども秘独くさまそくさよかりてとく
のれひとりしをくをとくてくいうだんと
ふまくらり給しこしるれど。末の世まで柏　柏木みてとくれなひて共と
のまさ宮のをん
ちさはありさ宮をとわづはあやまちうす　細 院の宮のめなひろるれば
ぬよ。物は宛をうこちそことすりぞくす
細 夕霧の事く
どいとうき人のまめ秋とめりよろ何ささ
きみくりめぐさこしの。却さそひめべ
きかさてもよそのは名をとばちてぬぎや
細 夕霧今は御ぶんもあらはとく
めくぢよのつるれはありさ御みごまあく
ぞぞのづしあり人よつけてなすぐ
さむことりやとさひなし給りとここよなら

かくは入あいぬを無曲と治
息不限のゆへ
としこめて　細 実なるを
無とぞとしこめてのまゝ
なり 哢 実なるありしやう
に 押てかなへ

あさはかなる人の心ゆるさるゝ所も侍りけり
それとつゞくとさま絡いとゆかしく（師 夕霧とかうきこえて）（抄 蘆葉の注に）
としこめての絡をおもひひとられんこ
との紫もうすくてさうらうさまへるさ
海かわらりよらうしげるうらまりり（抄 蘆葉のこゝろ）
つゞく長なうよごとりは人よとりまへ宗（孟 女二と治息不のゆへ）
いかなる法もくもさてやさうしれりのと
かくかほもへざらざりかくつまけんな
どの絡なくよいそじうくうちう志絡の（治 息不の限りのこゝろ）（地）
乃けるどもうくうはめよさしつさう
りのなうそれハかはうまさしいりてまで（こゝろそへ下ハ元杲なきぬるへ）
ひえよひえ入ぬの律師もさりつきさうく（さ）

えこなたへまかり
細 大日如来そしるなりと云経ハ
といふどぞいひしかど其志ろ
しもまことに業ハ限り
わかるゝ心物語らし強方
みな成佛不成佛とつくり
なり悉皆世るのまゝ通
文称ありける
師 是ハきこえ入ぬまゝりま
へのまゝなるべし 例の書
ざ届なり
こまひものそれまでと
なりと守なる
師 仕なりあはせひきえ
給へバそのきえまでの
法なかもあるべきなりや

まことに絡のうへてのこゝろなく見えさ（一生出まじくこもりし山寺のことと）
らひかく今ハ命をかぎりける山ごも
りとうくまでかくれたるもいでくら
てぶんこのちてくるいんとのゆかりの（教法の壇え）
くすくゆかりもつくくかはしかくさこ（行のたひるゝれぐ）
とほをならしていのりけるやうや乃（蘆葉之）
うきまでの絡としてとこゝろなうう
しりくさけぐゆかりよ大称慶り 治文
とうられさうゆのうまくかそてこしひも（治息不のゆへ）
給するまでさかりとさしうさう絡なう
うく世のさかしかとひられまてきるめう。
なかく我さんさりゑのしみとのうしまんと。（細 一夜出の宿とかりそんの寺のうちへ）

そうるることもりを置きて
村るすみりくるうりと今
其のやくまうなし

さ海く出がし出つるよ。やがて春えらうるぬ。
あいすくいうじとうへハどろうるむりし
ちりのくけまへどきさしくもづつひ給ふ
ぎりとこ角つおりくもおれど出いろ（嘆 給のけま）
つゐま給又しうひしく
こともうれさうなのりとてかぐらま
いりきさげどいまへのさ海ハ志つうらう。
蓍紫
気いとくれども出がしいりてつとそひ
かつまつりんで気りて。いまハつうひな（くでの須く）
しいとうり出がもとこもかぐろあうみら
ゆ花ぐうり出もすづさしくまもあくるぞ。
そうくひさとえ給ともいうそでり浪こら（法令人のまくる）
ら只世そこく
みはりるのめべさし。さしくるりう

ゐすき涙にあいまもらくよ
つきさ 孟 ゐをなりあなうさ
歌くハうつくるう人の罷
こうつしんとく

いつのまよりとこ為
いつのまよミそくしま
ひそうく古くの涙と
かくひるぞとく

ときこしていとゆくしう。たうさ涙るあ
みもつさふきさけざるうり。いまはさうくせ
さまへとひさうどういこそしまうれど。
蓍茶のさ菊く
むくこしいやうかくりのとも出がし給え（孟 かゐの傍の涵りくし）
ぞ。浪法のこむこわらて。わりくとい（そむ）
づつよ。さうべきうぐうくさへしそうら（嘆 莊君の傍へしまき人し）
とまれ。いまはうぐちのさ海いとうれし
うらうかぞし。さらくの流とかるひ。
いつのまよりとこ為。ゐ給どのもかぐりな
くさ出もろさまて。まり川らくし給へ（小歌人曲吊ひまし）
さと。大象法もりもちしの大厳よりて。（須）
をぐくいと志げう中のしよ角ふ山のこうと（朱雀院え）

〻ひるさこそとい　河　法集
のうへなりしきりも萩葉
のなげさとおがやるし

つゐよさとそわかるめし
細　法息所送云に久安抄
しきぐりしん成うく

もとこうけて。いとあはれなりみたう
いまへの。やくこのおもてこまて。　孟　細　山の寺門の法せうそこし
法ぐしりさひ給。ひとゝをとめくるやう給　細　是より法文の詞也
ところくうつれど。ゑいをしおりしう
のこゑてぐりつうすくひよ。らいる
ゑそうんひかさことをはさんりのさて。
おうげり給らんおりさ波。そうしくるう
うん。おられよこゝろぐつしきるづくろ
世のことそりよいかゞしあくさめさまん　萩葉の事
しおりめとここえ給ふねど。法せとこと
ゑ給。つゐよさそてあくめとの給ふか

くしくてゆのやがくゆきめしそてまつく
とて、れいの。やまよりのうちにあらくありさを　法息所ノ御事也
おぞぐよろ川よおつゝひきそしりうりく　萩花之
とりよもぞしこさてすうくんとそころや
もおしとこうし給られど。さてもくひの
ゑかべことすくゐべ。られいそこさうりて。ゆく　孟　葬送
しけうる御どふぞ。大将殿。おつしきうくそふ　のおうらのかどらる了　細　夕霧
ようのち日つりぞありうそうわずく人　の御盃日つぎさのうさしりてつけて夕の法と也之
ぞうふはのまそ。いとものうつ。哀よえ　三条よりての事也　夕霧の之
のおりちげくへんと給ふよこゝろ愛
えまそりくしもいそぐわそりまくさこ
とすぐとんでいさめこそ給れど。ち　夕霧といさむる也　久の
おそおりまいね。御ぐさんへと給ふそい　東久之

わるるへとくてゐるまよ
など　細　みはいそぐゆへて
孟　人やうの時ゑけバ居をと

ゑふく沖が由りを之

ますら男も、いくらそこらしゆくしけよひきし
送りてぐさ無三の事之
へぞてめぐらしうらぶうきのくさいらくし 隠して
てこのよしかそてよいれまかやかしくのう
こ出そてすりくうしてまり学也。つま 夕気力の
どの寺はてよとしらりてもまて、女房よ 淫くし
びりぞさ世話よ。おり浪人も地さまく、。 夕まり盃 誰も無正評之
抱かかくぬ程うりうくわくりまつまよ
ぞりくらみぐさあてかねの事へ来る
抱えの話やしさて、激りろよ地を無ぬ が 夕霧の評之
こうろづよさすれど、未の手紙人のけへ 夕霧力之 小兎の山里は息子の年生之
ひろどもを見しやりもいくしそうれ
細 議勝の話之 わうき世のりきう海の、ひくしへらへるのきつ 後り労子ものうれぬらく
そいしれしきみそりやしくみしひさく

妻もさしらね 細 妻へ
妻と離さるまいぞう、
是ハ妻らりも離させ
面白詞之 盃 妻えさむら
男がありとそれしりも
つるさくく
かかりくりしさ海
細 妻正私ハ出話の事更
多ハ仏をこぶりまへし
と見へかりくく

しろしうとこらりみさ海よらけ話
いうしがハ忠事へ事てうりし縁よ豪
をさもりゆどさんおわりと、いくわさ海 は自和の分別ろうう
しうろんとさうてまくるもかかりしうり
と女三の宮之しき海られよかりくハれんとこさんれよ
しぞうしと身がきるよ。さうべさとはひ 所思死ハ定之らうとの兄るるとし
あげうを、いとつくさんのはあぐり
すれバいいへとさるよ言話をず。いうるき 細 まうの出会
と之件が持詞之
こしさ世話とり、さうてもんるあづき、いて
ゐちしうろしぬはき海してうくりくらりく 残 然之
へいそぎさうつ世しまんるはこうろがへ

七九

こくの海へあまさ人とことき
ぬけわりと海そらんる
廿二丁の夕霧へはつ人る
きことくりとかねあど
の夕霧へ

ますまはおくねど
五 夕霧ゆへんおひよりりき

とおげしけりぬやうちなんもおもらり（嵐雪の旬之句）
待わびしくらぐくきこゆれどうやう
そうりてまられはつへさらしくとれがしこど（て藤戸女そへ おる）（五 旬歌）
とそふしつつもしきりそぞぐ（の今の夕霧が旬 節かね玉の旬 おなじ）
い海八あまき人しつしるしぬれあり海
まそうん まるつせまるうしはやのさせ（る 盃 夕の旬 之哄同）
待ねとことわどの人でもとむくる
海るれば こうへ やうべきうきゆうてさど（嗟 夕霧の後）（廿二の海）
い海あうしつもおひのどあ文志川（お 夕霧のか）
まり後るんよまうらんいいそうく（ちまんおもとく）（流息ふ乃）
中はりよとその情あり海るん ゆり記（奏の枝と同まて）
とのかまへば よはあかくひとく の我（かねるえし）

うの なおり うけまし
細夕霧のるくとおひるげ
きまりしくく
うら霊しまれる海よ
お夕霧とららやべき
まもあれど心 心
そぐれてやまつうう
もやおじいて
しばらくゆわりしせまつつ
らちも 廿二丁の法歌
きも限りあるんんど
かはん志ろまり 待まや
必しんくく ささに夕
霧の文志ろまりまおひ
るんよまうらんと以
分とらけまの何く

わしるげうしわりき海とうととらしげ
霊してうらなそうきまりさ海よる今り
待あべきゆふはつくじくうりはしきん
らどとのまじひよおしさせうぶ分て
だも待うるん さしべりく覚てなぐる
ねうらもうどうあつてしふくぶそろし
志川まとせかひるんわどよおしさせう
まそ後りんとて我ふとあくぬさ海なれ（かねの積え）
ばのまひ出るくしもらうふさぐりて げよ（夕霧も恐つひうく せわてく）
こえしやうよまぐへるられ る我おそ（お 文字旬）（お 藤主 と中）
あくなまていうしみの情をてまあ ば（ちうそめやせまえ）
うん分ど この後とさそ さらまつひ後

ちかきさう　御夕霧也
家領の人々　師　近侍
おく夕霧の御知行所の
人々とめしよせて
そぐやうなりつること
孟　着略なりと夕霧の
御助成にていかめしく
なるべし

とりあへずくしうしさみなるにひとさはけり
くれはてぬことゝもあらじかしと　夕霧の也　細　葬礼
おつるこゝちものさらにめづらしげなく
ことはくろき紙にてかへすとはかなく
ちかき御さうの人々めしよせてさるべ
きことゞもつかうまつるべくとおきてさだ
めて出給ひぬ。ことのにはかなればそぐやう　地
なりつることゞもいかめしう人かずなど　孟　夕霧の御はからひ也
もそひてくるほどにやまとのかみもありがたく
とのゝ御こゝろおきてをよろこびかし　夕霧とりなく
こまりきこゆ。なごりだになくあさ
ましきことゝ宮はふしまろび給へど　落葉

おやときこゆとも
孟　おやなりともかくなげきをさせまじき
よ。歎子の中もこのなげきをしくせじと　細同義

みねの煙をだにけぢかく
らくし　愚案　峯の煙こそ
しく峯の煙と山里にすまん
て御息所をとぶらひ奉らんとも
成給ふ岸の煙とも
なきあとの煙をしのびて
思ひ入られしなり

にしのひさしをやつして
孟　女三のまへのことく倚廬（イロ）
の心也　河　國史云　延暦八年
十二月皇太后宮崩　天皇

かひなし。おやときこゆともいとかくはなら
はすまじきものなりけり。見たてまつる人々も
此御ことを又ゆゝしうおもひなげく。やま　落葉の事
とのかみのこりのことゞもしたゝめて　大和守の御甥也　細　御息所のをひ也
かくこゝろぼそくてはえおはしまさじ　弄　御息所とも
いと御心のひまあらじなどきこゆれど　其の御甥也
ねのけぶりをだにけぢかくておもひ出
きこえんと此山里にすみはてなんと
おぼいたり。御いみにこもれる僧は東おもて
そなたのわた殿しもやなどにはかなきへだて　雑舎之
しつゝしのびやかにゐたり。にしのひ　師　脈着の心なるべし
さしをやつして宮はおはします。あけ

錫紵避正殿御西廂

今さん　はいいのちをなきにさまよふべきに命をながそなへたり

くろくもやかりしわかねど月比へぬれど。
九月になりぬ。山やどりいとかげしう。
木葉のこゝろすくなりて。しろ竹のこと
いとつらじき程すれば。やがてこのそうしき
りしほされて。ひろやまもすくてやがてしる
ぞさ。命さん。らよりすらんといとしく
うちとらず程をさふくふんでもとわ
けよ物がるのしらあまでうち名前ハ月ぞ
まとふしひやのしまふさびしげなる金紅
の傍るをところさびしらしろ竹のかれ
とつうしとかつつをめひとやのはまへよ
いかなれよそうみうみこゝろのからぞつらし
うしとやのしげけハつきをもね ほとゝつく
ひとこゝろ。まつで。きりてぞまはらんどぞ。
もとくろはあさましくさしくぞまくわり
はこちるようこゝ。ひろすく やがりしそて。
こし世給ふして世話きし出つゝ縁の世
のほつてよこんやうしんとむるまでろ
こうしてほんのはこ世話ざまうけて
ひくハいとゞつくこゝろうさるさぞの
りまりてよや月さうんでともろのまずひ
ぬ。ひとくぞりのはなしくゝるさとさる
はへやうひのためまてるるのじやがしりかにお
まりよはとんやれべかるしさてしてもり

まくろよあさましき
夕顔のこと。故法息所の
法病中にえむひ給ひきて
うせうとひしとかこの
ことしく

此人の院いとおぼえよけ
てゆへハ　孟夕顔のことを
いふぞ。女二のつらく思ふ
なり

わらんべにあはれともいひ
男の上の悲哀と同人は
表すしく哀れなる物と
しく
あはれとは皆せまりしと
細 夢上の女と夕霧昔の
幸なきひめうふし義式
此は我慈嘆と哀とも
同人へ心ざして勧むく
是に涙搜らずしてんひ
ちよ思うて

ぐりあつと、かぐりかくあやうくそへり、
給ひずへあいぐさいふかうひとすくまろくし
きやうかしらうしかうらしくのとら 細 異なうのとら
に花やてふやしうけでしくそあらくわらかべ
くにあはれとみひ、物うげしくさらさ（うき人の風流がらにうけていうくびてなしとく）
海のまとゞいふかくそふ人へいろあらう
あられよこそゆかばゆれせかりやのくらと
まうりしとゞいひとるしとさらまそう
に演社（ぢ）のおしくのくしきも思ふふみくら
むごくちりの世乃きれにゆかりやけく（哀 私がれどもうしろあれる）
やうのうきとそく
あらさぬくずらりのよしとけくし（孟 孝養く）
給しはつくいうろうげくるすくり乃した、

此吉寿の僧 細 好社太后よ
うらやみ極まるハ哀れしく云ひ
しく君うろしく思
うらしるうつうみがる
さらへらばしきく物
とくこ是物事の上に
祖母の此きうしく思う
それな夕霧の涙く寄
しあひしく
この世中乃うしきと
お夕霧夜様よりのす
と世易不と二うそう
うひとくうふく

太事演のうすらく金代よののれのことく（細 演社太后うわハ演氏の恕らうしとく）
ととくいとるゝ給ひひがりづめて御
とりのかゆそぶられしうとなうりしその
ありよ若君の様とべとうりわらそそさうさ
みしぞうく人がらのいろうとげまりて
物とりてうちとゞめうすりしとろよ、
あられもやすらつて人ならあらくかし
がらうけしう始がしあど、つれぐと
物とのそ悲しつでけしよくしくてし給
み女きるは此の世中乃くしく繊いる（細 云ふ房く）
みぐよりきさらへ家あそて所としそあらくらよ
つきらは海やうふし給ひありしうるみと、

あくれともつゝま
細 あるハ六二文字くゝそさゝ
そふく孟 哢の云く ぞ
まこの共くとられくを何
と魚めやさんとくかり
やあしきへ落葉のるり
ろうさくるかしきへ消息
不のうく
あげるのうさぐくまくへや
哢 此息所のうしとべうるゝ
ぬとくし細 とろうる
しるへやとし
いづれとう 細 さしくろを
ハとしかれうし。さしやら
ぬもそのよまおまぞ
まつざろくぶづれも同し
世とうりてろすきのと
しく 哢 同義 孟 世中 け

をりひえがたくて夕霧の空もまがふ入て
かしまつるさとろうよりうえしてさそ
まられまくるざろるきうとのぞうしま
めらし わられともかきまえりてつすざさめん
ありや无しさうすやるすしさ。如何つる
なきこそしろうくうれとあれバ消く
まそし。内くようくもひとりての給よ
げるのうさうしそへやと思げていとゞ
くとしすしひてよ
夕霧 いづれとかわきてながめんきえかへるつゆ
もくさばのうへとみぬ世を。ことえりさもつ
うしかれといひあくり。るいつぜし。つゝぞとゆ

かりやかしとかくとうけていづれとかくをしかりてやしか露も
消えよくまくもくらべてとろきのごとく 古と 秋霧の高の浮根よ露宿の消ゆりそだ
あしかりあ。畢竟作人皆是草の上の露なりうりのごとく 愚案 此文章ハあうや
あしきうきや如何きとよろとうけてこきえまきね露のへくするも草葉の上と
へんとぞ作人多のよし歎きつ世をあつもかきもいづれ此しもかて消ゆんぞくく
うべてその言き世を観して 孫々そうくく
秋らくへづそ まうろうと 孟 花雲井局の花秋につざてありの中もくにのかくぬるとも
あく 箋 雲井局のごとく夕霧の御心とくくまふ義と 師曰 哢 抄 夕霧の心にと與根
こ今荒義の義を用
露のかられとハ
彼岸ろす草葉の上と
こねせとかろうし 哢 或

ありし。露のあられとバさしとこえ
さざすうん歌つておりすらう作うし如づつ
つうく 若はしまびてやくさこまりのまり
れいとするどもくしてのどやかなると此
しもづめうれどもうりてしを思ふ所ま
ド。今へこのれるさ名のなふかへあ
あさかのとつきんさぐしげつさそつね
のとひまうかべさせのてそてし艶しさ

小萩の名ひ居りと
紅のうへ立てきる野路
くらしきの寺のすき
さくし。いつかく
小萩八世りくらき元
こやもの文とともへ不
しそくらうよくんとく
細 女郎花ちかうゆのと
わうしきあきそ不のゆかし
とくんふうその去り

暮のうちとも
孟風しや暮の蕎麦の
とまれへおわりやを
しるへかん

ちよ々れバ、小萩のれもひやてとわるがら
かきわくがひらこし縒りもでぶらじ
ハつかう葉しんみてとしく一穂がら
アの蒲ふくをきかうくへどころよりこ
ちそ。えしもとそくぎさらそ縒つしと。あ
りうりろ。九月十よ日。野山のさ紀
んかくことうぬ人ぐまこでやは
此ぶゆか。山風よえぬわぐの木末も紫
のろど紫をとちろわつて志うおく
そひらりまされよ。こうとれど縫のうゑ
うもうる。金紅うぐの声そくりして。人
のけしひいしとくかりしれがしし乃吹

ひさかもし 引板 師杖よ
わと清そへて引きふらし
て麻を驚るし捕し

むしのこゑしうあらげるよ
師杖へいぐさ麻の夜るさ
どのまかくへしきに
對して鳴るしらうし出風声
まうあるけまえきへ

らくしひさうよ。麻つくじ海がささのかくに
さしむきつ。やま田あひさかとせかぐろ
なども。あこさつつとともの中よおもつきそ
うらすくもられへかるう。游のうぬい
いとじ袖ゆりよ人と。地じろつしかよ。こく
しうれうくじろさきひぐく。草村のむ
しのこぞ。よりがあらげよるさ。こそらう
でうれさらくさのきてこよう。つらんぞうの
まれひらのこくおうけもひ出そづや
そくこぬうみど。これきいのこのごころ乃こ
とあれども。かりくうるやりへいとこ
へぶうき術の袖がるすしさるり。御乃つま

ゆそのきこゆめけるよ
ことさら　師 衣の重なる
れハすきてみゆる 秋ハ衣
の重衣 重ハ空の重衣を
用ゆ
さすがになにごころもなう
河海 夕陽の弱して夕
日のさし入を何心もなく
さしくる也
……

戸のもとに立よりたまひて やがてながめいだ
して立給へり なつかしきほどのなほし
に 色こまやかなる御ぞのうちめ いと 孟 打目ハ板引る也
けうらにすきて かげよはりたる夕 清らくハ孟けうらにと云也
日のさすがになにごころもなうさしきたる
に まばゆげに わざとなくあふぎをさし
かくし給へる手つき 女こそかうはあ
らまほしけれ それだにえあらぬをと
みたてまつる 物おもひのなぐさめに 夕霧をさして女三の宮方の女房の詞
しつべく ゑましきかほのにほひにて そこハ少将の君也 孟 夕霧の翫之
少将の君をとりわきてめしよす すの
こほどもなけれど おくのかたにや人のけ 養 夕霧の御そば近くべし

わらくてをなるちうちきて
師 夕霧の御心近くうさ
らんとてみなうち給そ
といふし様つきさし
くわふくらく入るべし
養 杳こ小野まで分入
あか深き物のあはれとハお
待のそ分て海仏ハかう
まじきをすぞさとく
云もつとある也
おむ夕日にさしむかひさ
ことの内ともおねの女も
そゆらさ細かう袖の多く
とうてうち夕霧も深し
とのすひ山の方を眺め
うちみじ　夕霧の用
あとて入て 養 おねの主
出つと見ぬつかそてなや
そくむしするら
つるばみのもきぬ
花 橡 頭和名トチクリ 黒
色之衣ふく 黒服と源
なし 六位四位以上の袍ども
色まそ濃くすまつつ衣の

ろめたくて えこまやかにもきこえ給は 細 さくてあり 孟 夕霧の御詞への切也
ず なほちかくてを なはなち給ひそ かく
山ふかくわけいる心ざしは へだてのこる 須人の事 御すまひ之
べくやは きりもいと深しや とて みね
ざとも見いれぬさまに 山の方をながめて
なほなほと せちにのたまへば にび色のき 細 夕霧の詞也
丁を すだれのつまより すこしおしいでて 池
すそをひきそばめつつゐたり 大和のか 師 古今伝あるべし
みのいもうとなれば はなれたてまつらぬ 孟 大和守ハ御息所のめひ也
うちに おさなくよりおほしたて給ひければ
きぬのいろいとこくて つるばみのもぎぬ 細 服を着たる也
ひとかさね こうちきて くちをしく つきせぬを 細 夕霧の詞 孟 御息所 弄 絹

衣しき国くうち手縁
さよそまつり枕よ見え
より奥深き 箋
ころんてとにとかめくれ
哢 引かれど言てまうけ
まわが意ハおやとやと
人のよみまく

そのかれくうさん
花夕顔の文乃世すの
よそうつしるくどこ宮を
不のくまなけまひしるす
と婚らし

るかし河寺
細 柏木逝去の時も此女
文の妙かす不ぐと妙がり
てむつらく そまり
くしきこし

坊すんよへて 細 女三宮の
あくかくし妙夕顔へ河夜する
る。こ哉とか待やし

たまや 細 夕顔の花くさの
ここくまて歌うさそふ海
じさきるしし妙 蔦かお
秋かの乱しこまて知つとる
とかねむに付て夕顔のか
くゆのまて

のゆけそ手毎てとし
ぬれにしはさらにのして。箋 文の心をとりて こうし
うちさはんのうつさ花むそふうよ。こころ
むしみもおくがれまてくころ人へこし
とがわられ給れバいまはさうよ志のふぐ
きくこすしとハくありくうくるてで給
おの今なきれはわたのさ海もの給出て。
いもしうるまき給。この人へもまして いうじ 箋 妙かの壺
うけさいろうつ。その夜乃は夜さんへえし 細 かねの縁し
待らぞ。おかりおしませ。いまはうさうの は 河 息不のし
こころよやうく妙がりいうてくまする
つまかし待の空乃ふりしきるよはとら。まど
ひよりうどもうらうはめよきてへの のれ

りのひきいれまうとうれんとのの 師 かへんどくつうく不何之河息不のまく
しはつとるまも。何どくはくゆかぬひあくべ
うちし。おりく妙かりく待しし 河 息不のさぐ
じき海よきづて給ししど。こうちへやえぇん
せんとそてとし
のれこころつよさまよふるん。やっして酒妙がし給
細 こやきまのくく此まつるし 箋曰
し。このれるすげきをどべ坊まくへまはさぐ我か
のれそしたまへて。おりされてくうさとあひ
しるどのどめがきけようちあげさって。
そろぐしうもあくとごさてや 哢 夕顔の影え
そもあまうよ妙がめしう。いしんひるまさ
細 公へもち不あるこ河男ちるべし
わうちうかう。いまはくしてげるすくとも。さ
忠きうはまくよおめてし給つんば 山とくと 細 未着焼之

あはれなる別の
明日臭木の別のうす 細 世を
らはるゝに相さるゝべ相本に
別まさるの[illegible]めべ
るらしく 孟 [illegible]て京
世を[illegible]ば此別もかるまで
きどらにまされせぬせる
れはとし
秋をとしめや 細 秋され
むしむし吟[illegible]に秋を
としめや独りるまへは
里をきく 細 その志の
ら家は[illegible]にわしれ
[illegible] 孟秋

もいとかなしきにも世の中とさへしなりえ
さら雲のゐるかなあればいとゞしくひ給え
んとしいとゞくらきに 女三の非西とおはしまさゞりしをさ
えさるをまへしけのことさるべきは
こそ世におもへどとかげそともえさぐ
かね世をうかりはかられのれて
ろゝるおもへさことりはなごしろ
げにかくのさまへどてもへさきと
りすてどらげさつてみてうえの
いとくれすくとられそとやそそ
里と畑と小野の志のつきけそそ
秋も志りてえも地しもぬとの[illegible]へば



鹿の[illegible]とりまかう
かゝ身 細 かれの志乃
音たり

とゝる山と 河 秋の夜
月のえて清されはらる[illegible]
の山もこそ夕ぐるゝ 細 引

夜すがらこの秋のはげしきによりて とかく雲のたな
くねまさぞ思へつゞまるゝほどかゝり
うへよしのびやすさこはつかひるほど
とゞさるしまうまつりはせるそこ
はかりおしまへでいまはらくあさまくさ
るをてきとのきまうにありでいみじうまへき
ばかりえねめることものあはれなるべき
きそのこともくるまいとゞ給へうじうい
がひるさいとよろりいとさげさ
てくるゝるもどりつも衣あるまでと
あかめて十三日の月いと[illegible]やるまさし
出めれば[illegible]とぐる山をもさるまどう[illegible]

ちよ及つもてくるゝきゟ
そしわるまじきをとし　哢
いもとあれといるさの山
ときくゝるゝしとえ中
きのくゝふ山をとくる
の山といひけるや　哢
八雲白尓

君達の　柏木の子達
河　媛撰二仍しど敬名る
人の又まやすらんく
すきんのるげさへいてね
やうゐのそこに強とる
ぐしてきこう　浮拳

ちうよ一条の宮へいさらゆかりにはかなくらう　女三宮の御事也
あがれてひつぎさるのことのゝぐれならを　師
こいつれだちながくとおぼしこめてひと　抄　御格子の事也
けとこそ月のことやるきあの比りく
とあらつよすゝすしころよち納えこくま　細　柏木の事也
てあそびあるし給しおはりくさとぶおほふ
こし人のけすゝさそぬつけなよひと　夕霧
つやどりる秋のよ九月とひとりごちつ　細　三条殿也
ゐよかりしても月をとこつゝころハそて
まあくれまつりさきしこぐらしうあ　細　夕霧のさ報を云り　師　夕
ぐらしれくをうれどこゝてらもめくと　霧ま書きりと也と
わくりらんへいやりよらむろくらくおほ　細　雲井御方也　女三宮の事也

りしらりさるくるまよ
雲井の嫉妬と夕
霧の雲ゐをとこうよのまふ
とところ雲井のへくさう
こゝまゝハ云ひ人ありけるわ
まつけそらく
六条院の人く　哢　彼院
まハさくあるとたえ
しもせど少年のやすぐ
らろおへと夕霧のつ孫
ま書ふてこと
へまうしんあハてうちうすき
抄　和との事ゐるり　哢　雲井
と夕霧のそひまやまこう
あしとく
人のをおれく　抄　さもあらん
ありつけさらばへの事ろ
めも御事しうるまじきと
こおすゝての年来さり投よ
御目もわかまじくぞく

ぐれてらぬかはけはひめかりけしくらう
しくまるへしひまつり六条院のひとくへ
とをすれハめそしさこめしよひさい
つゝるよしひあハぐらすくさ抄
さまろらうなしや我ものしきう云　雲井と云に妾あるうらの中に
うるしひゐまめしうハ人めとなれて中とも　夕霧ひとしげく
ぐてまし世のあめしまそけぐされめる　哢　ふるさらさ中に人もひしとく
とかやそくるまりとのめぬありめや
そこあへ抄す御へ我給おかくてむう家　哢　あやうかの人もひしとく
よこらうましきことやあんるとい
いつうるけはまくてり我をとあけぐさら
くきさるまさらとけぬふ　いかそ　夕も雲井もわたのつきうかく

ろとさへ　細 今ハうしわさ
まし高き家の世となしと前に
かう衲を隠しろとうへく
夕霧のかくは浩まふと着
さめてとうとハ徳り
賛下るハ交の浩有によわき
まうき着の世とをそて
もわきまへすわりわるゞ
と云ふを浩一言と云也
ゑ物来の浩一言　こゝを
こゝろみて祢もえらんべきぞ
とくし

いろ/\しハとの山の上
より高くきすのさ
き　雲井鴈のかくすにまる
まるし

中よひさやうてれより
夕霧の女によひきやうら
と御将の文乃中へ入くた
こしらへ

あさゆふよ　細 此事よ高き
しの激とわり夕霧乃
文よいふめしての事此何
わりとうへてより
うやよりみしみへしらん
細 川やうさん文されど
続あり過てまうに　暫時

暁 一示よみ　そむきぐくはるげさわりておさなきの
それはとかくこそとれいの文とぞいひて　ござ
夕霧のかく　うちまふいとんつきこなりしは浦たうしと返し
細 雲井鴈のかく　孟 奪之前の　やうかをぞの浩の返すいひとこまやかによう
こそぶらよそそうそ　わき浩志のべあへ
夕霧の心　どくりてさくつけしるお
夕　いつとは地ころゝをえぞさかけぬ本の返わ
まりてとらひしひとしふ人へ　あき地ろとと
夕霧の文 やういまてんぞしつくえそてもすかりもいふそ
ようしむるとらちすきひまゆう人めし
細 雲井鴈のかく　て浩川返ろよぞすはえらけそしかれ
夕霧ハいるうしそしてしらさくこゝろまりし
う地御もて田よけてぞそりて気　わがむしくし
それのこまやうえすうさらくようかそて小
お物そ側のさう　ころしらで地すで海よ
くひろきより　とうさそていと知しうよ　役わり
つうかあよでまでをひすさをまへうどぬと
とこうきて中よひきやうてられきちり
孟 夕のかく　細 めかはとまでぐらしと地わでそらりのう
まししさそうし人よろうりけうぞこゝろこ
すくさし海へうとうでけあつれハ
花 夫のよぎ　桐夕よ高ねとうとの山へさてそ　世
海やをとらしの激とやりわるらぐへうし
んみうしとるどりのちそしげようさこゝ

よ書拵かるすみも心を
けべきとふく

こかりみしへをえてわぶれ
ごとく　孟 紙へわざ与る名
やとりつしけ又ハ実ナナ
とられしく是ひしか、
源のうく

つまゑつる。流ほかでしごと前あう。人のり　細 見ゑわうえ
なごしそぐやうの千すくこん見ひつうう
しとりぐりしうらぐ仏なすくぬこと　細 かくふにえハあことと之慚愧の心
とこうしうじ男の人ぞそしハびいに
しまうへてうろくべきわざなりうら。あや
やぶごうろしをなりしんと思ふへし
まへど、えてときうけれど六条渡ふを　もひ在とまよりみかで見しきとく
こうしめして、いと扱しすうしる
せりひ志川めぐ人のそうつを雨ゑすゝめや
とくてら 語とおもしてえうらい
かしへえうしわくれてとわくさなる名
とゝり語し。ゆりそし比うしまうハう

ゆくぐみうも　細 段住大
乃の方かとんよしぎ
なるうく多り。雲井為
のれ方よるゝぐりしる
へ。

ろ宮のうわしとをくに
つけても　孟 源の哉るく
なうくしハ紫も宮
のるすわるへとのみを

若しかるにいとかしうりのぐくこかもこ
ころぐしをこゝろのかるべきこしさしえ
なれさろうひとそしぐるわくそで。れ
とゞるどをいつまも語りん。さえいちれこ　弘 夕霧のさの別
とうしれあればわしじ。むくをとしふ　なさまハあわじとく
よのれもびのろすえ。とをうくもく　源氏の君へもうう
ちいうべくとしるしびしと見えて。女のあ
乃えそ、いづさふかといしおしゝれと。　孟 女三のうろのくなりで雲井のうまと源らく
あやすくまうしめしなげくむしうされ
のゝへかをどうしきうかされのとも
しいぞつぐうやうのうめしなさて　源のく
つけてとなりしんのちうしつめうう

女ごゝろ男さ　細 紫上ガ
上をさへひきよせれたる方の世
のうすきさへひきうり

ひさつりきそゝ[illegible]すれへ
細 わすり物の[illegible]ともを
[illegible]ふられべ[illegible]
やのそ[illegible]
[illegible]物[illegible]義を
[illegible]
名の[illegible]
[illegible]
[illegible]
盃川[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]のの[illegible]ハ[illegible]
[illegible]細 紫上[illegible]
[illegible]女[illegible]
[illegible]
[illegible]物の義[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]世のつれ[illegible]
べきそは[illegible]
[illegible]
[illegible]

むごんさいしゃう　細 河海
[illegible]無言の行[illegible]
[illegible]河 無言
太子ハ波羅奈国王之太子
其名休魄容端正生而
十三年無言 太子休魄経
師法師[illegible]
[illegible]無言の行と[illegible]
[illegible]下の[illegible]
[illegible]
紙[illegible]　細 中庸[illegible]
[illegible]女の一生[illegible]
[illegible]
[illegible]
つれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
細 勤青月表紙三十年[illegible]
[illegible] 盃青表紙
[illegible]河海抄[illegible]
の義共に以河内本の[illegible]

無言[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]女一の[illegible]
八紫上の猶[illegible]　[illegible]夕霧源氏の[illegible]
[illegible]
細 源の詞[illegible]
[illegible]
[illegible]表紙[illegible]　細[illegible]
[illegible]世[illegible]
[illegible]細 樂天ガ朝露貪名利の[illegible]
[illegible]

不用ぐ保ハ平家世末崔
の法師位の母源廿一峯く
色して三十年まろうよ
とく三十年も行るゝき
まうのくつくうく法皇源を
朱の法竈君も此比よの
うすく入右大府此業祀を
自愛しおして尊三解說
し給え　細流ことせしよ
てわするこへ栢木とせある
ふて三年ときに元暁日
まうしんかしげるすき
細夕霧の綱かしげるすき
今までも何うとるれ
ゆくさうすめかさせらう
とうへ
くかぐえくしもそが
とまうるき人ハ生そ世
にあう猪ハともくも
すうとらくなわとへ
哀よろるしきく

つまよつもでこのうこそりてこゝろびもむ
（細 今日ろ比日さろよつう）
きもらんとゑふとさことのとやうろうや
うつてもちくもくれ、ひとけりさわさ
ぬやしとのあふまうしとるかしげるさひさ
（暁 夕霧の若世の人のろうを月であふて）
よ、とのかゑてえけるすれども、かの世て
しそ給めれまてでしてこやもてとこうの
（咲 るろね、うとゝむ）
四十九日のわきるまでやまとのうくるふり
しのあそんひとりのうひ給ふいとあ
それるうさきあうやならくえさきよ
がうこひとハいけう世のうきうけそてう
あ世のもてしそうるみしう給へれとき
（細 源の詞と 孟ろの詞）
こもしの人流しうもとのしりひとあん

みもいはらひるけきあへらんぞやう
きこしうへこのちうきぐ年でいうとよ
（孟 此息尽を源の詞とみる）
かれくえくころまとの皇家てそくち
おしうしずめやもきく人のうちぬもれ
やうくの世よつけそかしさけぎかう
（お 末摘花とまうきまゝえ）
やさそをまぬべきさ人のうくうせゆく
と流もつうじうやどうきせんしうる
まらのここそいうしよりし給入道の
（孟 朱の法恵子とのうえ）
矣ちかうしつきみはらくゝうまち給
（女三）
思人ぎ海もうくおりすんしとの給ふこ
（夕霧の詞 所 女三の法師ハいうくまうさとえ）
こうえいつぐりのし給ふんぞやまぞ
こうえつまるうらし人のけるひへ

内心ハいうぞものしまかん
孟夕詞え女二のすハ但
ものくまうでかひそ

又の御こともうけどいとゝ
わすれ　細 或設いとつれな
しとゆかり源の心又の御よ
をかしくて孟 源の心又の御よ
もとの御ともの心をみなして
まれさうしよ。すけしらよ
孟うしこぞそてまよのつき
みへし。お源の我哭ぞそ
よ是又も無用くし

あざうのんわさき　細 設仕
大臣も不審しきんひて夕
霧ハあはれんあれバ御返

ぞうとよろん。おもしろうちうけ給はりぞうり
しうどうそうさいよのつのでよ。ぞとのづ
うらひよのまうしいそわくいちう拙まえん
はしきてくまうて。そのはくともうけど。
いとつれすくかたうのをくらけころ　細 源の心之　健固之
よごひそめてんとくいさかんよるみかじ。　実人のはじめつらくあたりは変せぬ拙なれとて
まうるぞうん拙うしまれさうしよいとい　イさゝかも　言出
でん。もわいすしと拙かりしてやゝねうくて　お源氏の
れからじよ。しるひとうすらてをさせ　法なく　孟 夕の之
まふしのきこてをのづうしうくれうけま
いはほ夜あさどふるこうまて。さやいあろくさきよ　孟 設仕く
どもうくのうくんあさうやうよやりしるのは

のはかのんわきれなるく
しらえひきのへ　箋
朱の此頭よのを設仕ハ出
ひきのへ　明　柏木の由り
昔のはん
なれバ兄弟の人くも此不
さやう　誦経なとも
思ふへし
此の人のかやうのまさよ
細 世よ用らるゝ人とひ
とまてこ　晦　時を知
らん人の心ろすあどかる
やうらずしく
げよあなさとも御うう
お御よ　孟 朱の由祖と
柏木又夕霧と親角お
あそひし異説　嘆おま
さとむ御うう御は妄
二の柏木の後夕霧よな
びき給ひしといでと所
もなかりめせどうしろ
とあるさんへハ出語なす
出来れバ夕霧といとひ
なかりよ御無縁へなりけ
道

そりうるうやうの日ハ昔のはんあれん。ぞう　孟 此良ゝの由くその日く
ちとまうでよるひ給ひど給ふど。最まうり　細 紅梅の大臣年之　紅梅也
をいうめしうことせまふこれうれをさ御く　下の心
とゝしをてまうれば。此の人のうやうのま
ざよとゝしずうんあうけり。さやうくて　細 此小野に住みうそ
もくゝてうんと。ぞうしくうしきうれ　まあべきよく　細 出家の心ゞしく
ど。彼よ人のりくしそうしまれば。ひとあく　朱雀へ女二の宮出家の心ざしを成合して　女二の宮出家の
おじそてしまうり。げよあゆさとと御うう　るまと朱雀の御作候之
ぞ御わ。身をとりてまうしまつきことよてもわ
らゐ。どうそうこなうきんなん。すうくさう　花宮く
さ御しそ。あうまじれ痛紙さう。つきくえが　よめゆひてへ　孟 御余なりすも出来なんとく
あしきとれ。この世後の世ならぬよみじう

ことやうのことく
細 日しやうのみちとも 愚
河海 同様の物とりて〈く
朱雀院ともは出家あり
宮へ入せらしゆき後られ
女三宮の同やうに如
おもてをとりしめまつ
ころは海してそそしも
うけと 菩提のため
発心ありて心をすまし
てのちは出家あるへきと
朱雀院作とも
さやうの事乃玉をよすな
り 細 名をゆきよせらん
しきうりくちり おり夕
霧とくるや実ちりのあり
ゆうしねやうのうちよ尼よ
如きわしとせのゆかしおくべタ
霧よねそひてかつせんとり
をうつくしきうちも
、朱雀の御わざなりやし
細 夕霧は今
さらぐてて
まへうやうのまさぐし

[盃 名のさへんとく] [朱雀の御寺のうり] しさとうどみまざかうらうらまくに絃
ちらは二宮のおすぢこし身をやりしを
[お女三 まて] へすすふるさやうよ人のそひいふもとをこそ
[お家かくらとのへと] うち身よなうやもべきゆはれくるのどう
らざうりやうのことくおくさひ絃りん [いまく]
をしうそあらべし世のうさまつけてはよ [細 人心ざてうちべりそとく]
へわく人まろさわざなりかくとひとう
うさまて今すすしおさめあらくわさ尼し
てこそとをうしきとくひく世のしあり
そうこのうさしうは名をそてゆうつめ [細 夕霧のことの心え]
さんきさやうのつしれそらすなするよつ
けそうむじしるしいそれし尼りんし

[朱雀の] 絃おほとうらうさうりとてみわしうれ [細 夕霧のこと]
てもの絃りんをおほくさうんつきさな [朱雀は仏知るす志あうづ女二]
きうしく法ほしみぐうもうしと出ほさ
[のかまうんとき] 人もいそおしきもほ人我さんそくある
うちんと気してあん。こゆすらいうけそ [夕霧との中の物る事]
をこえて絃りぬりある。大ねとのうく [夕霧の心ことまでへ気の心]
[うちのさまふやうれともとも要なるとく] ひなすつうもも今へおいるしうのれこう [細 気の徒心之 盃 女二宮]
[因心ありつきさ夕霧へうてとも] よゆるし絃んをはくうけるあうぞ
もどそうのそてろうりすうそうとん [細 宮も心所と]
みはならうもんいうくへもんならさんへよま [盃 心有 初しとちへ]
うしわさきとゞへ物わちそてえろろてえあ
[て我物まて女とき] こしそとてきすくまさうしてんさしう

きこえずともせでこもりつる也とこそ 孟 今まうり
師 今まで参らざる事をいひてそ
もいひはらしとしても
とよりあらそあさなお
侍まじきさんとぞ

こうしそれども 細 此段ハ
へ撰侍君ある許あれさ
なんらもれどかそよ
そうく侍るしまふとお
まされども女とも侍侍
ふまうら暮侍くあれさ
みたらんしきそさそ
みなりハいへり

あそびけらうじてらつきさにもりてうい、
ずらうんもいとうるくしうべしとおぼえ
まて一条よりりうきすべき日ぞの日つう
細 一条より宮よ侍り事之 孟 彦業の御為其の日と定る也
ときさめてやまとのうえめしておるべき
一条の君の御をと
さ侍うのくまひとやのうらひしひそ川
らひさえそりてども女どもは人あげう
もとうすしまくうしとてぞうきこしるやとよ
あうしひすて法んづりひるのしわるべき
師 壁代などまへて幕の事ある也
さ侍うめでとうくべしろ法王屏風まで〜れ
まいらどもまでおりしうつ、やまとのかさ
細 大和守が家まてまうる也
よの侍さくうの家みぞいそさつうま
細 夕霧一条より女まうる也
つ〜とのみぞその日へまれおりしおそて法

なのとも侍り
細 大和の国のうち 晩 大和
これハ国境のうちとらり
けよ此内さみとりて
晩 夕霧のんぢしとけさう
の方ふかくかりへいかうれ
あうてさこうみらるなど
そとくし 愚案 女二人の
御方まとりておまよハ夕
霧のく窓所あるかぞま

孟 法師の…
車法前るしまれ侍るやくさうらまりさ
らしと物かしの侍とくつりうしうゆめてし
師 大和守が館之事也
やまとのかさもさうしよらけ侍つうじてろ
女二の宮らのまきは法敷なと
かぞくりのしきれまてだちそとなすりまづけさ
こか侍とのこやづくハよ君んよまうさうひ
侍とかきおそ侍らると
てつきりまり川つまぬはくくのこともま
侍りまりうづりめべしこやのうられ
なのれうろとるうれて
こともまのへゆづきさ人も侍うもどいとくよ
お夕霧のかす
あいくしうりろとこのふらそとうくよ
を大和守のかく
ろ川よゆ侍しいとくるむとげるこのうるま
とりて出まわろゆはりるすしずしそおへ
しきすまづさ法あうさ侍うすれどきこ

そそゐしとあびきまふ
べきことハおもす御ぎき
浅からねども
さーそいゐしへも申べきよ
うかがひぬさめし
箋 皇女にもいかゞなるさ
やうのこともありさる
ものとし 愚案 左その
やうは貞女の道にて
はんよりうぬこのさ
かしこきはかれば女二乃
依男一所がうり世のみし
まかんさまでるずまま

何ならむもふきゐるをも
細 宮男の人々で云々
女のそゐしきとし

そハいかにも。なんぞよかるまじきぬことめし
おぼしけれ。ひとむかしやハ世のつくさ給
をおぼせまじき。いとゆかしくおぼします
をとしとあり。さりけんはかりも世になし。女
のはづかしからひとかりよ。わが御身をよりえ
しめかりこまづさやうのあらんなる
ひと殊あるありしづきまつらんよしとも
げられたてそかうきれんのうしこまれ
よそそでも。それはうらみべき物なれ。
君ぐらのまさし思ふとなり給ふる
なかり所いさらせじさこしくとも。はて
しろじとよ所うまうらなあまでし

たをかねとせじ
細 二人の女房生まく孟左
道をさこともむべし
たをかおねとも女二の皮
女へ

まづしのはらまへ 細 今く
こまうくをなれども
を思わかるねこと 既 今く
へはらてとりつしとえなさ
るまよろづしハゆとろく
めうしとお結く上根下根
のみの何事にもくる
物く

いひつゞけて。たゞおねをきこしめしつけん
てきこしてうしろつるよりことよりなく
わざやうるはせじと。人々のなすら
へよするも。我よりとあしく思ひひくる
よそぢをまて枕ぎこそぐ
しようきぬてそこなまへだ。ちこんぞうら
ぞして。すうしゆかりされど。人くちうさ
みもこなすしんぞうしのはからるハ
いうじのゆかりくやく人はこなくつきこれ植
みるとあくれぬ海くよんていくさゆうよと
ゆかりつゞりて又かりおねゆりしうかハねかせ
をみけふくしし。これさくけ敢いと

のありけし　細　すゑ海のあ
まれ夕顔の媛氏といへる
ものゝ方よりも引よ
ろしの方と引くべし
本の相もありし
同媛も如くこと
師云もとのきよ八和
いひくるふ[illegible]べし
くりそしえがぶらん
細　女三宮の[illegible]くりし
つゆひきとも[illegible]
まつくろく紙方のうへ八
あるもちさも同しう
とし師　紙方八一向あるに
もうれ辞そしれが
よろこびひんの[illegible]
当よすげんまても
せよありがき引きのひ
兄るがよろうえて[illegible]
らねとやうんやうくへて
の[illegible]よりてこれ[illegible]

なほはらてさう喚まつひ、よろづよりその
ぐすしられど
花　のがれがたき[illegible]よりまじつさ
ものねりてよるゝひとどりられむるひとい川よ
八つらくお[illegible]をどゞそのころ八[illegible]
ひきとも[illegible]　どやうの[illegible]八うれしうくして、くどろ
まりかのしられ八くりそさはりざんよ
ざ[illegible]の[illegible]しけあろ[illegible]
しうわくしさゝやうへはひきわざん、
ひとぞうをうしそ[illegible]
[illegible]　とゝ[illegible]ば、そ[illegible]のごとも[illegible]
[illegible]れのそぞくしらて、ゐのくら

[illegible]くとうて[illegible]べき八[illegible]
しうんき　一哢[illegible]
とうそ[illegible]
[illegible]　細　[illegible]
[illegible]
[illegible]
きうらみもうきるぞ
てらひまへしく

手習　唐櫃
てうこうしひ川まう川のりれどわく
しうね[illegible]やうのあれるれどこれ
されどそくらひされば、ひらりとまり
あづうとおしてぞ[illegible]くれ車よのり給
[illegible]しうきうしのとものしれまで、こ
らもてり給しとき[illegible]
うもれ[illegible]つくろひまうし[illegible]
給しと[illegible]まりて[illegible]
れそしよそへて、[illegible]をそくもろかれ
そうつゝもあられぬべ

無しさのなぐさめがてらさ
孟 經若とみえたるとある
まで此哥の心にきこしら
ろうさもしやうぐさへ事せ給
ふす 細 服者の個客え
皆黒染るるぐ也れども未
そのへのへぞ又此猶一ハ
京を不のけしきみとも
ひきハとくめかり
花 服者のまねるずは
思ひかへしまさ為ら
ざんまでいたさもく
まで為りよ
絶しさづさりわりし 嘆 誦經よ
どそらんふそてかしこ
しく
浦島のよがくらるん
花 一条宮よ帰給を浦
島のみか在々よゆりしに
さくへしてく玉の箱よ
つきそうし島のよとえ
つるく 細 河海の注せ
河 丹後国風土記曰長谷
朝倉宮天皇御世浦

細 女三宮の方
尼しさのすぐさめがてらふして侍
まくり世のとこれくらさもまぐしく
あへさせし海つぞかの浦るしまつりし
らそんのそこるすりろりず經よをさせ給
しどりさまよくめつるなりかりし
島のてがらくらるんかりしまつかされば
夜のくらりすしげりおく人げ此浦く
てかしもね海るりかし車しきそたり
まみ我さるよふり思とゆりわくどう
としうしてそ此浦るられべとくよ
をかり給つぞいとおやしうちく
しき海りかし人ぐもこそかりと
細 慰おのの
細 花よ御經之
細 一条宮よかりつきてそく
浅茅のふく
嘆 浦島よりしと合せたり
下車たまひぬく
女三の君を

與二水江浦嶋子一獨乗二小船一為レ釣得二五色亀一忽為二婦人一其容美麗女娘教令二眠目一即至二海中
博大之嶋一其地如レ敷レ玉其為二歡宴一万倍二人間一於レ茲成二夫婦之理一與子遊二仙都一三歳
忽起二懐土之心一女娘取二玉匣一授二與子一曰慎莫レ開見一即相分乗レ船到二本土一問二郷人一於二浦嶋
子之家一人郷人答曰吾聞二古老一先世浦嶋子遊二蒼海一不レ還今經二三百歳一與子忘二前日
期一忽開二玉匣一未レ見之間芳蘭之體率二于風雲一翩去ル畧記之
おもねさまなり
つらねくらとつゝり
細 此文の夫しひかやさみつきそくでもやうらりてうしめを
義 浦島るそくきたる語勢なり

細 夕霧之
づらふ夜ハひのんしの暮乃をかりてゆりく
とわがれりまよりにきうしひてすそ浦さ
ぢやよおりてす 三条夜ゆはん人でゆえりまあ
さ海しうる里給ゆかりれいつの程よきとし
ことぞとゆかりさきりおようりよおりかめ
細 雲の居の浦之
細 夕霧ハ好色ならずとハさうひまそ
ゆかりなりもそのふうしりはかなそひそはうく
細 三條のうちを案じ給ふとく
わうことどこのまりしりは浦をひとはうく
されど年へてなるとく我をとあけるゝ
されど年へくならるる
細 年比とあらしるべき
さるくなり

く女の法ならひ
細 二人の法ならひなるべき
事とハされともいかゞ
なり
法まうきを 細 服中なれ
ば嫁娶の儀式やうなる
事もなきなり 弄同

中〳〵立かへりて
師説今ハ帰給てハそれ
るべき事なれども本
く物とみゆべし

何事も男のとかは
細 かの守の言ハ男のと
かうしても世にしたかひ
らびひて給ふしくなり 孟 此
まちかへてハとるなり

まりしをとまりつる
細 まさハ又の夕霧の後
ろそへ給といやうの事
ハ世にまゝひかしと也

わかきてもぞ給ふなりとのこゝろもひとし
てく女の法ならひ給ふなりゆくもひとへに人
りすく。とてかくてことのはじめよりそ
細 若宮の御こと 孟 女二のようなるで八人の中にもとなくく
知しかれ。ばおもひけるとさ改まりて
わらじめゆくしげすれど。猶まつしを
これらがまうかるよ。ひとつまてかねる
孫 夕霧落葉の御方へ
君とのこゞろを御人ちふ。けしきろふぞしまく
細 かの君の給ふ
よるがうちかきれぱかるよあをもよきく
孫 落葉の言へ返答して
御さまを又中〳〵ろくりて猶笑
そてなきさ人のやうゆくらん。ふさ世給
うらみさくゆりそとぞ。つらしとのこちが
きしれだなのはごとも男のまゝめしてそ給
いとまづいしうちうてゝさとふてうん
細 夕霧の詞 歌に乃法なく
と思ひ。いとおやしうらやうやくさも
しかはさゞひて。いそけすくうつろえが
なきさはこゝろまとひてありきれとぞひ
法分別のわざとのまゝて
わかさ御人の法となめとげなめとせ
孟 かの後へ
のりきあはれしうの給つかれば。いなで
又女二宮もうせさせ給へんときに
やう〳〵今はのかれゝいつぐ人なるまじき
なべさるやと。あけくちつくみがうりぐち
細 我君とハ夕霧をさして云
よまらかりけられぞ。あがえとうくと
しうちてひよろたまはれうちかつつそ
夕霧の詞也
を給そとまをすら。いとまさふとぬよゝ
れ。よくめさ御しとく人まるもけまさへ

まごうしなへげよせつゝね
養 かねり伺く夕暮のまざ
ありくねせりるとゑの心を
何とまふへげまとつしと
つりと付らし 師 花にまぎ
ありくね世りるとの身ふ伺を
くけそか侍の景之
せづりね店ゝがま人のけよ
こそつし 養 人をきく
せよきくかびひろそ也店
人のくせとし 師 ゑの店
人の世られぬるとし
ことうつばま何方よりへ
まり人作らん 養 上の細
まいそぞ今まとことつり
せんと夕暮穴のくま人分
五暮しかやうにゝ夕暮の
わりまりじとうりとより
うくそびひりうりる性
うかゑの店ゝよおりのま
しうきすじのぶれまふが
素性ゝ二つと人へよ批判さ
せじゆりさへり人へ方人
ようんしとかねがしられ
てりうし 師曰

やうすゝん身こそいそがしそれいそぎひと
みもこともきんとのとん方にすしとゑ
しての子んへ、さそとぐるよいとおしうちあり。 細 かねのこと
養 かねり伺 師曰
まだそうしねへげるより川ゝね店ゝがまん乃
養 氣の字之
けるもそとくしうりへげるよ。何そよう 孟 句切
はよゝ人作しんと子すゝんとかさうしら
もうひねゝ。くんごはそれど。いやはとうれ 廿二の店ゝ二八これとく 其の続くりて
さまべいさゝうねだ。やうぞてこの人をひくさ 孟 かねく
よそく。どうそうりよいりますよ。宴いひとん 中書内八きりまえねともとえ 廿二のこと
くうさけるくあうりさうさん人の心ちかり
久りとわくくつらそれへ。りくしらさ
やうみはいひさくぐことしくらしく

山どりのくら 細 麗 雉 雉
一雨よ弱さり鳥之。独宿の
るすをいつり 何おへ ひびき
の山鳥のおのちらうとの
ありくし夜とひとりうも
独人ひりはきそらうはわる
か山鳥の新らうかぞ抱へ
ろうしき
うそのこくしとへいへ 名うう
まゆくるとしへいぶめるるすま
てあけゆりじとの心く

ぬりらめるよ歩まし ひとうちうせまそぐ 孟 畳一帖 細 其の
ちうりさして地陣とのごりりまそう。もれ 孟 女二世
をいつまでみりはかぞうりよううれうち 流人之孟如此の付ハ久るゝおりてもりつきそでおんぞとし
みかろ人のこゝろとをいひとうすらうに 細 きみくぬ女房名ぐも主名とあことなりしと地ろがとく
如しう地陣をいぢ。地らしく窓いめざ海しうつ 夕暮之
らしとゐひゆのしのまへどぐうぞうりみそくは 細 さみくぬるゝりと 師 言も
なかよのりそするゝゝことゝろへいふのとうりに 花ちゞそそいりてそうわれどしと
堂てよとりいよそひあへしの子ふ山どりの
うろぞし路りらかうちしくしてゆうさに 師 一雨よ弱ぬ之
なりぬぐてのきこくしとへいひとく地りく 孟 夕暮退出之
うちへりれど。出のふつてきくいさうりのひ 孟 直之初直面の心ある退 細 抱そうでやそえんとく 師
まどうずまとうりしうきそへまくしいとつ 抱いふき中ぞふて絶すつく 落葉のこ

うつゝまぼろし
細 関の岩かどハさしこゝを
さしていふといへり又ハそら
のめぐりさるまゝにつら
かき関の岩門をあけごね
ま関の鎖のまゝかたく守
せら 師 岩門ハあり
ごのうちにさめかくしてね
めぐりきたりとハいふ
まきうとハいふ事後撰ニ弁
合の判乃詞ま岩門ハ門ハ
あるかしく作りかをし
岩ハ門の心をかしやさしき
抄 愛月

まきの
夕
うつゝまぼろしの夢の夜さま
さしてまいる関の岩かどさしてんかくるき
れうろかりくらしとおもく出給ふ気色よ
ぞ見えしてやすらひ給ひんじのしへ 花ちる 細 呉竹の
条の女もこゝなすりすへがらくらの衣
細 花ちる里の詞 人目急之
まくりるおどろよ涙ゆかいらるゝ出てしとよりハ
とりと見わたるのこまふことよ御車 細 花散里
そへされども そは うらやのふは花の紙とえ
の思ひて
まそまかりまふ ぶちも筆紙人のつひる
細 夕霧の羽人のつひをもとをおほせし
しつゝきこゝよ待りこゝにゆめもてはいりくち
細 花ちる里宿送の心しとて
わづかりあかりきこ顔よりひとくゝろちめ

ありぬこみ筆をまゝゆやかゝる人のるまゝやかにやし
かゝりなんのゝ顔よりれこゝろのれまうひ
うちゃんまゐしん後のくしきろくまいそや
うちなこの待しかハりしまりのかづくし
孟夕の秋心ざしとなきそくふ
とも待しくふかくとおの人まりめると
さ顔ぐいそよ人おつひ待しんうしさう
とあかおもしきこと ともおやいとつく人に
そ抱ひひさがろのさ物よあれとくらわくひ
つらのさつしじころまんなる紙世まへじと
細 女三宮と孟夕の細之
かうおもくらてあまよるうるんとおひ
そそ夕霧に案うりを心ひ給がれまふとく
ひとへ何くれまふあれハ何よりハかるゝこゝ
たそくゑく御へ
おまくまそくふくても待るへこそかさのう
夢よろ之 抄 句

あのまさか 句 抄 女三宮の心深
のれば夕霧の抱かも何ぞ
なりなえんとく
こゝろありこゝ涙みても何
つきさと 抄 雲井雁し女二

あやうんのかけかしろとど
抄 夕霧の宮言よの葉を
おもちき人よおの罪ハお
ほそべきこうしの心おり
そのへく 孟 しみとみて
おかをとハそやうなる
御の仰しこと

夕 まのかく
んざえられても
細 尼まであひても由
しる人ぐへしく 河 嫌疑
師女二と夕霧の御こと
方侍方の…
尼まで…
世の難ひとそられても
御息所の遺言ハ…

人のくちはやく
人の御ためにも思ひつれど
嫌疑もかゝりけるか夕霧
のみしるかるべし

孟 三条の姫君と云お里
のゝ云とうけて姫君を
いふ也、人をいふ鬼

細 源の御方々など
花散里と姫て紫上明石上
なとの事を夕の詞也 孟

よくかんざえられても、まさこの御ゆかりなれ
さべしと思ふへく、くらうつひはあらひ
侍りなり。院のまうしせ給へしんみな。こ
とのつゐでに侍らばやうにまろび
やすきせ給ふ人、おりくてもどりるさそ
ろつみと御所の侍りんとそりけり侍
さしけるやうのすさふくこそ。人のい
さめもそぶりしのこころもそぞくられ
ぬやうに侍るれと思のひやうるやくなふ
人のいひなかやと思ひつゝと侍てる
さりやうのかる御事もしてハこれいつ
ねのしるれど、三条の姫君のおぼさん

こゝそいとをしけれ。のとやかにならひ
給うて、ときこえ給へば、らうたげにもの給
はせなすひめぎみかな。いとおにしく侍
るさがなものを。などてかそれをもおろか
にはもてなし侍らむ。かしこけれど
御ありさまどもにても、をしはから
せ給へ。なだらかならんのみこそ、人はつゐの
ことには侍めれ。さがなくことがましきも
しばしはなまむつかしう、わづらはしきやう
にはゞからるゝことあれど、それにしも
したがひはつまじきわざなれば
ことのみだれいできぬるのち、我も人も

おもほしたりや　細人にあらぬ
人の心にくゝおぼえらるゝことも
あるやうしく　眠堪忍を
るれじこそあれ終には
らくぬとく人のおもへる

そそゆつしき　解ぞそと
ハ詞をおもうてよくゝ。
好しきハもちうしらら
よくんへり花これも花
ちる里の説のごとく
いさしるあるべしき
細夕顔のすまゐのさま乃
すひて源の紙れたるへを
ハ指ゑおのふるまふそく
まうしらう人のとのが
細貫人も身のほどの其糺
を志しぶるぬ

こうんつゆり
細夕顔の頼むへの恋よ
を紺方の前訓おもしく

げにわかうしやうすばえるきの比心　細供奉人
めりぬることゝ倒くはありうくらさててい
らのれゝこのけんなどこそいめでしさゝ　細花散里之
のまいこまりもて待めれなしし悔めさ
ゑまくいまうひすそ。めのゝあめしまひさ　孟花ちる之
いそおふかどよ。身の人とうるさきかくして　御随身さ花散里の説
わくうれぬべうそて　あかしきゝとハ院の　花源之　白
らうしのけうをそへ人志しぬやうゝは。い
まりおぼくしきけうてろつくひをぞ。さ　夕顔のすまゐのさま
いしと坊りひく。いまし日給。志うぞ　源の御けしき　孟夕のやどと源の
とふとかめし給かうのえこそうしう人の。　惟光かものゝまゐる
なのがく人志しぬやうはみえし待ぬるとのまへ

ぐ。さうんつのまよろのこちらしもいかり　夕顔の宿　ぬしのよく
免地値をらうて。あうハうしきこそれなうへ
おもしでも。つしよくおさめて待らんと　細源の地よりへ　孟源
とそでげにおかしくしき。まつり。地よりへよ氣
まあへれハうのつしきしきうしめしこれど。　源の心　孟夕顔の家の女
あすよりハきうくりかよりくめがのでふでう
ちまりりまへるよ。いしめそでてゝうう　弄夕顔の容色之
よらかごろうくわひまさうりあへるゝさ
うりあすめれさうさ歯力すきざく紙しく給
とゝ人のめもくべきさ歯りしたつぞ。
畳紙をつゝゆるしつく。おぶやうよりの
さうけよ。かうしさうりよ白ひともいかし

袖もひちぬれてしもか
つきてぞ　朝いそぎ哉
あくにも別るゝものゝ
ぬれてはあかねもおりせばよ
さ露かな

まつり、袖をひきとゞめぬけりうとのほどよ
からにおりきもて、ひくほなるさとろおう。（夕顔丸好色もし）
わびしくのかりさまりる。こしけりぞうし。
女まてるどりめぐくさうんとくしそ（廿三の人を推はかりまて）（夕顔の人を思ひやる）
あるどうもしきらへんと、我はよるそしこ
出わたて、日しらけて夜あけはまちうりまつり（細 三条をさし 孟 雲井のゝ）
給まり。わか君もうすぢうくらくしげ（孟 次くし）
わくまかりれおそひさまふ。女君へすこし乃（夕顔の入まで雲井のゝ）
ちらよふしあさつり。入まつれどめをとあ
とせ給ひそ、うしさうまことはおかれとも（夕顔の心）
給もしうかるれど、そうぞうらいよると
りそあ給りぞ。けさぞひさやりの

いづくそやうつそ
あらとといづくとをまて
おもいしぞくく

夕ぐれはふるさとの出そ
此夜いみくけるなりれとく
えうらこえろまだと夕
書の此のひしゆくらくも
かこひまひそと雲井の廻

いりくとそおりしつりぞもまらいふやう（細 雲井居個く）
ちつきつねよいとまさのまくべばおうらく
かりしそてちんしそとのまるんまてそ（思ひよそへたるにや）（勝）
とまらりけよそ出られしさ夜いふく
けとあけもばへえうしとをちうじとお
まうろりあうひす給とくや（雲井の人の心）
しらそしやそこさ海よりまめいらく（細 雲井居の句く）
ら人わくらよあかりみづきさ男みもあら（夕顔をさしてのまて）（雲井の男をのらく）
ねはいつちもくうとなんとふてる我り
くづまふ覧し出そあいふく年出を
へみづよくやしさ袖とうそ出とわ
うりまくるさ海いつくしうあいさらう（雲井の心）

うくしめうけり
細 夕顔の御こと 西
夕顔の御ことハあらハ
ものらくし此君の御事を
よもしりたまはぬ
らうらうじき 細 御ことし
そこはかと飛鳥井めくと恐ろし
気色をそへてさうしくて
そこうらめし思ひ

ろくなそこのかなしきぬ
これなくしきけハおもひまつ
なしきのきこゆるとうけの
まへ
まそしもちうくかくなん
細 夕顔の御こと花ちる
ひねしの給へハらうしうかへ
うらかたにうつしうかへ
西これハゆふかほのきえ給
あはれなりしもえこらんしの細
とうけて借光同じの契り
まづ夕顔のとえかよふる
なき給へ

つきしみかひやうなおおゝめかくらかた
いとおしげなるらうくさうゆふさうげよ
ちゝしぐらおもしけんぢはやめられ
てこのとまりて いまハゆふくろくもあ
飛鳥井 独て待つ 西他年くんくんしき
らうとぬきまされ ぐくさけにそへて
細 霊の居のことなし
やとこうれよひなし あらんハ何ゆりかぞ
細 直あふこえ 飛鳥井 西あそこしれぬこと
とよおいくしみよ給ねかへりなうん
これハめうしきけんあいたやうにすまそ
てさきあんハしろめうしとのてまゆよ
夕顔のえて
いとあ らうとう海のとまたれハと海やり
西 夕顔とし
よそしひてちくまそうと給ハあるめよ
そよハゆるぢうくしてもゆくさしくそこ
らぢかりみられをむかしきえんの御らく
冥途
ろなうびよいくよくらうつぐくべうかりよみ
細 日本紀に泉門ヨミトとかけりと云々 大音通ずる也
ぢのいそさハさうしてハらうがうさうしう
後世まての契
ハせしくく
とひとつれうく吹えて かすむくれさうし
細 霊井居ハ公達さへゑし
らんさうしあそくさめまへハいとけりやうよ
夕霧のとへ給ふをきこしかハ空なる思ひなし
ころくりらうらうしつさくんそくそあん
すうへるれハあるとぶかりでくく給なかしう
細 やりなきつくし 和のなさし
なめつうしるすぢうとりのゝ給へといて裏
夕霧のくて
細 女二の宮
とゆびいもわりしゆハ空ゆかくうれをいてま
がうろとそくさゝつよりのしくさゝ人の
夕霧にあひまいらせぬとある
けりひめはえし給ひつるどりうるかなる
ぬとそえし
らぬことかくかまよるあそとをひるり

〇めのよく雲[illegible]
細 雲井居のごとく夕霧の
[illegible]ゆへ 孟 一[illegible]く
[illegible]八[illegible]合[illegible]と夕のおい
[illegible]ちて[illegible]

給はば[illegible]とこ[illegible]しうるおべいうるの[illegible]
此のかくびうと[illegible]
ま[illegible]ぐしん[illegible]ぐとく[illegible]あはく[illegible]
細 夕霧[illegible]
[illegible]して 驚り[illegible]よ[illegible]もれ[illegible]
[illegible] 暁
じ[illegible]す[illegible]して[illegible]ゆへ[illegible]
師 雲井居の[illegible]
い[illegible]る[illegible]わぞし給 唯 日々[illegible]
ら[illegible]りの[illegible]く[illegible]ま[illegible]
細 夕霧の節
おつとど 着[illegible]すあよんぎ[illegible]のと[illegible]
[illegible]し[illegible]海 地[illegible]の つ[illegible]
給 仕
雲み[illegible]の[illegible]
し給 しは 世中の[illegible]れ[illegible]名[illegible]
し[illegible]ど[illegible]ん[illegible]こと わん[illegible]して[illegible]
も[illegible] 氣色 [illegible]と 本[illegible]
も[illegible]給八 母[illegible]

しきり[illegible]し 細[illegible]
[illegible]よつて氣色[illegible]も
雲井居一人よ[illegible]と[illegible]
[illegible]
暁 夕霧九[illegible]
[illegible]
井居の[illegible]給[illegible]
人[illegible]のひとよ[illegible]ん の
[illegible]しと[illegible]く[illegible]
[illegible]しとぶ人 貞心[illegible]
と[illegible]して[illegible]
女[illegible]夫よ 嫁せ[illegible]と
[illegible]夕霧の[illegible]お
[illegible]

[illegible]人[illegible]り[illegible]今[illegible]も[illegible]
孟 夕霧の[illegible]
さき[illegible]と[illegible]
雲[illegible]
[illegible]りそ[illegible]と[illegible]
細 [illegible]
み[illegible]とつ[illegible]
い[illegible]を[illegible]そ[illegible]れ[illegible]
ひと川よりそ[illegible]れ[illegible]も[illegible]
余[illegible]八雲井よ[illegible]
み[illegible]まへや いのち[illegible]そ[illegible]め[illegible]世
孟 雲[illegible]
[illegible]れ[illegible]そ[illegible]給[illegible]も[illegible]
[illegible]の[illegible]給[illegible]お[illegible] 哀[illegible]も[illegible]
仰[illegible]
[illegible]中の[illegible]ず[illegible]契[illegible]ける
お 夕霧の[illegible]
[illegible]れと[illegible]り[illegible]ひ[illegible]ども
めぐ[illegible]つく[illegible]と[illegible]

ねてさえしめすひめてこうつくろひ
げうじて出まう(?)ほげよこいご
して忍のびびくくさうどの出られど
ぬぎさとめまくるひとくの袖をひくさ
しきて
雲分
るらし身とうしうへらく松陰の木ま
のまよこちるやくへかしあらうかひし
まそへえもぐもそしうりとひとも
よそうと夕霧の雲にまそくごとよのさまか侍さらもまてさも
の初く
人うるれとろくれ
夕
まつし海のあまれぬるぬるれねとそ

わきうへつてゝはどくしめやいうらいだ

てらしる侍なりやりこうはる侍さし
かりごろよれ出(?)く
こりあまるとひとくくてのこやいわ
まうしう々うしぬゆめしも初あるべさ
箋 世のそうのくくと
と例の出る稲もそあるべうとと侍にそ
こし給らあろと。しう何よゆめしくれいさ
孟 女二も出とい出(?)らべく
ともあうしくい出ずるうふいつまうう給。
しその出しとど我旧人のとぞあしろさ
とひらろつくるすいうしかりうろ人
花 夕霧の約一腸二稿もそあれあやらそく
のゆうりと出ずまうてその衣とさあめ
給つぢもはられかりて結んづうるうりと

て飛よらく改らむしゆ
れしこし

くいとあやふくにまつね
へうくろうねかうを
咲ぬるすきつぬ人多く改
うちに女家のつらく岩
と夕顔へいふく 孟箋同義
みりふくろてみつしく海
箋 夕顔ハ世間普通の人
とハ各別く家法そらく

思しつくし給ふ人もいとあはれにこそすかいすさ 廿二の詞
さうこし人ぐらゝすなりあるらんよわりられ
給ひずんどもいうしも思し人らせ給へれどつての
頭じゞへ一ちらじよそひろうくてとたらく
てじるすくさんとあんふく出かりの給
りすとどうくいとおやかくよ志らねん多く
うらねめるどあるいとじうつくさ拠とり
思しおふとうて由とうろいみうしざ海うよ
うえろやうこさ拠とさうじおうりろ世り
あし打るげさそ例のやうらそ物さうし
まさはゞりのこうねじそてもさうしたん
うり思のして泊るやおうへさうよつのんぐ

わかきこのかみ月をと
箋 この家の法相よ法服
のなりじいてしまうしとうけ
てく
程からそうれよ
箋 家の法相とされとは
喪の中乃るを夕顔の周
忌みうをさ中をとかりとこ之同 師
人のそく御りんしもしろ
がりょるみのめ 孟 天りさる
らぬ男れらさをとばさうしを
きえし夕の流人がすへの新
つけるらハ曲をとるさとて
とうりまのそれらひ給之
一とたうまみうさ流人うまへ
箋 此一条の家に入居まそ
公界をハ御を探り給ぬ
夕の人を根まみく家の流
名ハまくいうその中うるる
様ー
人の咲りしりん おも
人のそう御りんるすると
家の相ぜうけてく
ことうこと 箋 人の江にく

わかきこのかみ月をもとうしつくれん
あごつきもちず思してまへどさ紙ろうこ 箋 家の法相
ごれよそへてもりるをされらうるすんいを
じうつくさ人のそく御りらんくともよ
うがよるのめすくきうけら男れらさどいは
さう拠そごしさうよこうろうさ流人が
まへすりとまさいひへしうくて給へて 夕顔の弟のまふを文女家の根をして 師 夕顔のあく箋さわ
はうきのこまりそうしまうそうさうそろ
くのとやいひとのそくりらさんしもこ まことて此咲ちて果給ふらしく
とうりとちしさうう うての人めとうり 細 さうら給ふ人 孟 廿二の詞よ語ひて
まへいぐらくの流人つうひとこのりまふさ 夕顔の詞 此歌そおんと夕顔之
海よりるひくも志ずうしいうさけこまん 細 此心やすらかにおもしと之 哭

らんも銘義なき名現ぞくるゝり
らくの浦んづるひさ　義
なり　下畧

ぐまよもいふへ　細　おねの心
く夕霧のむねよもげなと
おかくなりそまちかい女
文のむし師匠も夕霧の道
ありごめの心の口より
孟　夕霧を断としておゐ
捨がを引とそられ
なかるか

これよりまきろ　細　此夕
霧頼よるさまへとも
皆気済てきんかるべ
しとし　孟　夕霧をいと
ひてもみいりみなりと
をもるきんと女二のまか
らぬへくとぞすなる

とりなを拘すてねらるよ
師もひしげしてのとり
久されねらちよう立
そめて流名へぞ支まあげ
あくべくもあくしとえ
まげさ流名かり　細　村雨
のこらかて舩名のころ
あそりて孟　潔白を示
とりひまかともしらけさ

流服の頃はとのあいりしが暫くハ秘しるる事まんへいなくてと
（爰夕霧のうこにあうつるぬ旅のとそれある頃まこ）
よりぬる頃のいとうくてありかく
まをてりきしく系つくとハ人の流名いう（猩夕霧の言ひ出し父）
（悼ぎあくとくくの降むしハ不可然とく）
ぐそいとおしりぐへきひとくよ拘を笑して
（慈悲のとみそ流名別るさるすけ然也とく）
おさまずけなりてそいとおしくれをすごとの（猩おねの）
人をきめあへとぐそよとをとひ もとすかるも（細おねのとこ）
今いんぐるしようずげるくめゆつゝ海
あれバ人ぐようまよめりごめの心乃もち
まりいれまりてぞり、いくじうある海（夕霧と）（蔭祭の心）
うつくしきかて ぬひとをまげようる世
の人乃らまれハられよりやまるめをもこ
もりべりなとくそのりしきん喚す

喚るて我ぬろけ夕霧と涙くくるしうかが
も、ゆくしいまうりよ笑てあるべきことハ（夕霧こし）
まとくてしあくとを云の縁かあうあるへ
れよもおりしうもゆやしうくしまへとど
つらくんづきなしとのこゆがいくらり、やと（蔭祭のと）（細夕霧）
くうにらんなさきるき拘よ此かされる勇（の頃と）
のうりは、らぐひあくとろうくれバおう（孟芸頼）
まじきころのつまそあわらんも、ら（これまてまつまさハもひへまりやまりとも拘ぞとく）
あくなやきうゆがく傍れど、そうへを
拘すくねらちよ、あずのこけさ流名よ
うはおんいかひるく笑しまりれ云
あよされるぬとき、勇とあずぐるくあしえ

みな〳〵ありしごとく
今人の情ぞとひきくらべてこそ
御ひとへにさるの下は月
にうりつきさう情物に一

いそまくらけるよ　海人那
木石皆有情　白氏文集
今案 百千万十二 磐城
と出ていはきとよめ
り 易氏織成 不動の心
花 いはきとは木石のこと
へ枕まくらは海の磐
城ハ海岸なりや

ゆかりなるとてうらみしもかりこそあら
よるべなくへまでもそてつゆしもかりうせ
とまらしまふ ひとへの情ぞをひきくて
こそいけさしとは絹綾なる錦の海
のうらかくしてあれしかれども いでしう
ふそいかなれば いとかう哀なるすへば
いじうさふへもかくらりよかりめれ
ばとのづしゆかふかしこそもあるとぞいへん
本まらけよるすひきうてさい契とぞかう
てかうしるなども のやうかありかぞやれ
なずまんとさひきうよ めずらうあれば
しくて三条の君乃忠のゆへんし いは

しんとうすまいらうりしあへのひとひら
さうしよのこと年比はまてこしゝるさ
さ面よらうさゝとけまうするさ海とあ
ひ出かとけがらすていとあなかさるか
さつげしかれども あれどもちふかとう
らんめてし給へるすけきあり給へか
のとされりましうて出いうんをあやし
されども云ふいひとまりてこゝろのどかよお
とすうくさへひ女わかるかとあさましと
さやいぬかひくいかくうちとさこれ家の
まさうとぞぞくかましされかれとかは
つうさ物かくあそれるかぬかりごとあるもしと

うれりてひとあらさる
しさひつけられは
孟女二の雅面おひとつり
つけて雲井居と古より
何かりすくさひかりさ
なよかうくしくのかやう
のとす松根ふくれなど
ゆくうしさつげられ
きバさのさ女二へとまうに
とらぞて夕の身げきあ
りしまして

かの人なりけりと
孟 女二と夕霧のこし
めそへたまへ

よき御かたちの世のほかにあくまでみくへの
はかなくひつゞけしもぎゞしから。あかりこそ
さらすこよろこびきこえて。かゞりうをき
ひそかにおぼしけり。ぐらつらくさきら
まで。わざと思ひ出つゝけもしひのりさ
しかよ。げにりけれぞ。のぞ。ひきやりいと
落葉のふりうちそておかへる御衣とし
うそそうれさるれど。うちさやうき。ゐもし
て。かのもとすきまよ。いとおそよ女ゐらく。
御あにのきみたちもしまされつ。此と
のちさ御はかりつしうちさまつる時より
をもくものしけるの程見ゆるになみ
細 柏木也
きみしげや。こゐの。ことしるまうし

はかなきまゝよおもひあまりしと
孟 柏木の女二の宮よりうちしらうと
ある人といふとぶらひしと
女二の宮の思ひ出てまして
いはでうちとけもありて
と夕霧のふかく思ふれども
みなおもはえ

いかならむにさこそしるまゝよ
発 よろけがと言をえ
うちとけみすいたぐと
あかりとうぶんや

御のかきしの松の
発 此の御方と女三の御方
之 細 同義 ゆかりごめより始
なり

さまざまのなげきりとひあはれにうら
いけにこ
まかせ給へと。こゝのおもひよそへ
しのばしく。いつれはまして。か
いまだうちとめ。すかはきほどもよ
そもとよのひさんやとこゑみまいら
うちつれしにてうち思ひくさみよせめ
しつ。わがはらをとうしらく。給ふ。
朱雀院 此は仕太后の御らるゝ也
さりとてしらくもしこそも人のまへ
細 服の中也
みちなんとのつきさうしんくるまさり
みりさんいとくかくれはあくさあめくし
なりけり。はてゝつゞけりあるさ御のひま
しのさよまれり。おとくとろくはるへうひ

ぢんのまへの人やそれと
細 経箱などにくしつら
ぬ衲の 孟 時経などハ脇
よりおきてそれ沈の二階
のちがひ棚に沈地の方
しつらひ
人々もあざやかならぬさ
の山吹 異 清勝の人の衣
裳花山吹の花にふかき
なとをとりそくる事など
しつらへ
女ごゝろなく 細 ゆきを示
からう作りて 孟 女がた
行むかうれば泊息所の
御さうしなどかけ置かうり
花女のまえのかたなとを
女房とりふく

も。いたくしめやかなれば。かんぢうにかゝりて 義 香染 香にても染たる也
異 服忌の具たとへはみくしつくひつくそくるとし
ハ屏風などそへりやのさうよりくにぞ見ゆる
もて用ること
のほうまつるにこらくしほやにこえねぬ楊
ぢんのまへよりいろの山のうらそくらる
師のよること
ぢんまそてさうひさらやまとのうちのそれ
さるさぬかり。人もあざやかならぬいろの。
義 くちなし 紅梅
やまぶきうつのかさねあをぎみあひみすど
義 紫のうすくてさ 異 薄色といへ 孟 紫也
孟 服中なれど香服のやうにて泊息所もろ人の事也
どこうへさとぞいろのものあをくちなし
とをどうくもさらりてはかなきまつる。女
そそつまそてさうひすくもろいのくと花の
うへきえのうらよまぎさいろう
めそでいかるがしも人などまいらひらくの

あ大和ふる
この人ひとりのつまつひてどもあかくぢり
夕霧のこと
ゑねやんごとすぢきみあらうとの御ゆかりと
きこてがりどつどめぐりけりけいしるとも
致所
さきうげにあかりてまだぞうるゐぎぢりふ
さまざうひていとゆきとうくをあて
雲の居く
もう女はれがしつくりやめぐほどに三条殿ぞ
ま三ちん無路とも君がかれはこうとおぼひ出ぐ心也
なるありとるしりやかしりそうしつそ
ゆゑつれゆるあべ人のこゝろいろいはずぐりる
くるえどさうしハ爾てあしあるりとしと世
どうふゝとうりらむりてぞいうな国よりて
花雲井
お内の父の御あつまりつう
このあけさとぞえんどえふれハ御か
よの人方さんとをりゝる路まけるを

かつてあふらうけれども
お泊息所の所縁男しう
宮司もタ霧よおそれてま
ゐらるべし
うくせめてすまさされかれ
異 夕霧のかくしけれど
ト書まは他所 意をも承知
の事ハく継留なるとけるハ
ぬなよるくきる
世をこゝろ(?)とさなう
異 貴人のもらうハ父ハ
おるとのうしく人のおひ
しもら今人ならへまでもろ
よし

いてひらくこゝろは
何意よんにうごいてかう
なる風情なりひらいて見さ
なりなるともいへく

花弘徽殿女御のうく
女院の御里に出させ給ふ御ほどにはあらじとおもひ
めしあそばすらむ袖をひきとゞめけるに御前に 雲井のうく
されてまいのやうみもいそぎいそうへり 三条殿のうく
給へども大納殿もうくしあそばされ候ふよ。 夕霧のうく
いとこうはものし給ひ候ふこのお
とゞもまいらせ給ふかくしうのとめさ
哥そころさみすゞよろしくひそかれ
つまよ花やいまつりてへりつるてめでに海
しそうしうじおどびびいく志さこ
とおもいで給つべきとおどろかれあそ 孟夕霧のうく
三条殿よりまいりまいらすれば、えいびやうじ 細夕霧の御方うく
しんとうとまりまつれば娘えいしいらさん

まへの待り給ふとは
細 雲井居里にて往給
小菊のはぬ給いさうく
嘆 雲井居のことまて
つねよ居行方よは女
房しうらぐうりとまて
女御の御方にまうり
行く

はしおこるうことをぞおもてかなしに お雲井と言ふうく
お夕霧と思ふ達の又付て往来うく
えうけてしかるしびむつれおらへと花
まてまつりて。られへもうすさ給なとにぐう 夕霧のうく
しし地陰ごとそうそとこびしくやみうして。 夕霧より雲井へゆりうく
ひとへはなすれさまへど、ほとあるくぞよみし。 雲井のうく
夕霧のうく
くうろくるしうるなかゞくしれしやよと。
りの志う笑てまへど地とくじのこうゝくくは給は 往仕居のうと待りて
ん前をあれはべくしてとぞしてまり
孟 女院の御方え
まうらん殿よるんおりすうとそし。例のま
さり給うこれごぶらのうとうふて一夜、いろえ
うらぞめのとこらそひとくおかうれば。いま 細夕霧
の御え 御人しくのまえし
さてるはいかくしの流まじらひやう 孟店ま言ふ

しんてんの清めしらんハ
国府殿へ参りするする
とかり

かくしきん人の
み蓮のすく

人をこてうしことよ始まつときさみてかどかし
ん義のはなじらひハおさはすしうしぬ法ん（細 武る波お生後の網く）
のすらどハどうしばをしのましられどもさるべき
まやむりしらりらるよそるすれがくてう思さこ
えて今ハうくらぞくちきさ人のかそうくあ
られるとうつことよはすいべきこうやえし
よのとさきてりうさうすき一かつしようらえ（箋 ときの蔵京のるし）
りそしおすしまかべくやといとうじうあのぞめ
しうとやまへいるよつもいまりとさあこ（細 雲か居の在中へ）
給まりうおうすれバ今もとさうすとうべきとまま（箋る）
ともしぬと行うはとそおやまつさひらく（細 おもうく）
へ此かしすそどいられしうつてへあしうめ

いひりてゆけハ　ちり居り
かしこき　御式ひのそでぞ
きらが居うかしこき信濃
たまうらそちの梅のうり
しもとぞ　細川が
よ居ふべうしらぞりく
あやしうあまてしあり
夕霧のごく　玉葉とおび
きしうども雲井へ出
あれがく

いろろゆくやう　細　ゆば
ふしおろ事しと夕霧ハ
れあつぞうるすあれぞく

そてりらん　師　うきり
とのあへさしうバられも
きうつそてりらんと
かり

とゆしおつりおずうりの法りく人やいい（盃 居のくしりの如く　細 夕霧の如く）
りていけれど居り居かあしきつそしむる（師 女の内名てとさるべかれまし　盃 一居など）
てりうるまへことあくてぞの釈ハひと（まかりて法入られもおのて夕の独外しおのえ）
さかしまうりおやまうする雲るすりけれ
ともひつて君ぶらせもへよみとまそてり
しうよまさいうよ始がしきざるうん海（細 女三宮めく）
そひやりゆのしやそうしぬころづくしる
れバいるするへかりやうるかこともしうれ（色給やさしてらのてし）
が色うんるなど抱らりしめべう始ばく給ふ（盃 夕のごく）
始めれバへのところんをトかくしきう給（盃 夕より雲み入ゆし）
うきりとの給そてバさそてらんがしこる（細 忠実つよそひ宮めあやかりとく）
あんでもらうしげよこひきさめり（細 母もおかさそ）

まゝくしさ
細 一条君
へ川まつて行まひては
まし 盃まゐらへよい進ら
さんの夕霧ゆかりあらん
れてさし 師のりやうち
ちねあんのうしく夕霧の
おどしてのゆへをまく
おがしてあぶなくと思く

しとえりのこしまつるやうあらんとはこ
お君達を公方へ嫁の入かと仰らぬとせんとし
ぐしもをひ粋がさこく絶どもりくをりそ
るりゆるんとらどうしきそしまくへまぢりく
まねのこし
しきほとろうそ。このとぶちとさんや。
盃 君の気をさして
ちくぬ所まみそまうて給りんとおそう
お夕の留 姫君を三条へつれゆかんとし
し。姫君といづまへりしまぢりよく糸
つきくろつもちしをるひ進へつねゐもま
師 三条殿のこゝろし
いりうぐりしこふとんぐのらくさ残。
地あのゞ所りそでずまこさすんとりて給。
姫君の御こゝろし
まくごいとうくゆけうくおかしげそ地まく
夕霧のて
もといとあれとまきまて。母君のに
盃 夕霧の姫君
の御しお雲井の君の御の前にし
あへよおりうひ給そいとこくらし

ちひとうらくさうろき
師うら勅をゆへ定めてを
肯とうろうりをとひと
尽とりぶぎやうよるき
るとし
きづしハさてもつえあつて
義 雲井へ致仕の前の御へ
御ふ方りせしれやうと
盃 致仕の君の尉て
姨母あつべきうき又
しりくりひそめうとあがば
義 すでまえやをとた
てらうてうへハかうしをそ
すぢめをとろぞされな
とく。こぐ致仕大臣の性
く盃あれてハ頁ての人
みろうよりひそめさうバ何
りえぬて御うまりんぞと
の孫まろて

らぐりあれ
細 表と思
ふハ柏木へうらありとを
ハ夕霧まかうびさある

おがをのよりとして
を[illegible]
ちひようちくさるさんありへいとおもしとこまぎ
致仕大臣
あうとりひちまきをまりまふ地ぐりか
とい我ゆあそでへんわうられるうやうに思
しるげくをげしハさてもと給りぞ。どのづ
義 夕霧の御とぞ分別のさこさとし
うらちふちとしうりのをまうらん地我女乃
くひさてつまうりもくろうてハうてく地ぞ
乃ゞ[illegible]
尽りざまりうらくいひそあ川をます
師乃手より八自然と夕霧の人々をさんとし
ぢ。るりよりハ地あれてかもしもくろりまふ
とのづらし人のろしきこうころうりぐん へハいとこえ
盃 致仕のよし
るんとの給ハせて。このよやよふらん
君ハ人
のかねの君をば彼まてまりのよ
細 葵の上
致仕
ちくぐりあれやさにとこうろ[illegible]ぬなきさ

ありくくに出りあり
ありりくとこりあり孟説
仕の七二への寺く相承の名
諸よ衣とい云ひ唐と中
宮よ方よ六らうめしと
くやうに見ゑとふく
よ要りありくらとこあ
ええ
とりりよ　細　内か方さき
衛之師　蓋人か将もと
よらわきりつけまろ本
あれだく

て衣と云ひらるめしとらるくるゑ見ゑつ
やうしてみえ見づきとく
たるあくしとあられかき銭かねりてあくらし
てとびりよ入ゑふられこおりてのとをれこよ
孟分坐
わくらくもさし出ゑくへで抱ちらしてあくし
蓋菜のんく　蓋人か称之
ゑハおしてまびしと見えをこのこは
中よいとくちらくめやすさ海りそ
孟伯るとと云ひ出さら抱之
のどやりよきはししていかしへとと出さ
細かねの句
ぬ気色ありゑりてれよるこちし
てかねくしうねよさとゆくんじゆう
孟備人ありとく
まずりやあらんるどぞらりぞそすあ給
蓋菜のんて　抄蓋菜之
ふけてしいとさてしみくてられわさし
細人の句
まえりくおりとのしゆりへがなれらうさし

くづさるし出りそとも
男たるびさしゆへり
あれバく付る
しく仏具ありしひ給ゑ
りんなずくへ衣蓋菜の
けさめ扇あるやうへよハ
あるしまりし物とをく
あよゆへり　細　男ひとり
とこ多くよのこ事い
うずありるずぞしとし
義　男の教るしぬ然
しとももうしとも人よ
ずりるべきを程なき
しく

つきて
かりきてけりかくきやうこよぶじかくこん
こはとし
細つんじ書ハきうーか
とみのくさすんごさしやりてかりまりて愛
蓋菜のさ句之　細　家の流之孟
えさみすれぞにとびいらうるすそてごらんへおえ
仏具本のおりせりと
をゆしりバうりよこうろつさすとあかり
なぐしもつそ銭うくい給ハましと出給
かよぶすきのあらぐさまさればいら
してうきをやりき給りず
蓋菜
あまゆへの世よりぞするぬ男ひろうとけし
ともひろすとをこくよのこ見えしける
ますよりきもとぢめ給をめでつみく
とつくきてりそし給つかねハ人へどと抱被
細　かねの句之
しそ日ずるにみでぬよりまするのまえへ

今かりハ千ぢおもひちて
て 細 夕霧のよしまもて
それにつく 師のさうく
とぞしし と今まちり
されば是よりね ハれ
ありさとく、
いとぐしくへからぬ
お役仕よりの文ながに
藤袴の気いよくとけが
されどさゆへ夕霧のお
くがれすぐひし。雲のへ
言ふるべし

秋とまくりよ 細 雲井房ハいりを此間
侍のむけをねきさまよ
頼よ今此文の事を案
く雲井房をそふへん
なし

しらざるささぬらし侍ると今よりハしもて
がおもらしそてつるよ気ぬずしぬいげ 孟 内 かと
うけて細くまうるでまとく るどもゆうされぬべきさ。しもの言るし
あかりれ侍らぬらんし侍まどさらしさ 細雲
ざくとさそ出ましぬ。いづく、しくへらう 藤袴の見
うぬ、あ気色。あくがれまどひます侍ど天
井房へ 蔵の気ハ日ころかうましよ。物ぼしるげく
こし志げし。内侍のすけうらこと物さぐ 孟 惟光ヶ女 細 藤内侍の典侍之也女の養にあくとてもへ
ますれをりくりよゆうさぬ梅よの沼る 雲ゐの
おまうくおるつりふくさことも出。さうよ
なるとしもそふまるどほ時ぐらさそまめ
つれバ。ぎうてしらり

秋ありハ 細 あまる秋ある
バ秋ありのうへよとあう
らべさ袖ありと今雲
井房のうあよめしらす
とく 師 人のふあをを
と八雲井房の心よく
らゆ侍ふやけし 細 もり
けの井所の心房の様より
とかうしきゆ 既 む
の志ゆへ
ハおかれ 細 秋男ハ人の
うへまで秋男にへて
ハ物りそぬとく 異雲井
房の衣ぞ前さへのうへ
うさるすハ表とそかれど
を男に八へんと八物りと
ねどの内侍の前ハ男に
ゑどく人のこゑよりと
しかうすとあかう 師内
侍のふ物りひつれて此
をことかうと感しよりよ
らく
このむりし世中ざての説と

内侍 うぎうすかハ男よ志へねしよのうら秋へ
のふあふもめでしを袖かれ。雲ゐのをとハ
さまへどりのあるれる侍、ほどのつきて
よかれといとさすよハ物がしどとなかなを
うさんぞつきにけり
雲ゐ 人の世ありさとき表とふりかた男よう
へんとはちえぞかりし秋ものをあつきとあず 孟 内侍らく
ありまして表よるうどのむりし世中ござえ
の折ぐみはこのなけりのさうそて人もつれぬ
りのよおびひをあまへつらしうどそわしさ 箕 若の秋の袖雲ゐ
房をゆるしまひての後を云 めそ役ハいとし侍さうよつれなくわかり 孟 房の此出のうら八典侍の今の
世出なうさそ 中まうりすまひて。ぬ千すぐるよぞうらハあまりここよ

箋 雲井局を引いれて殺
仕の御方まどられしを
よしせのるく

もろく十二人 何ごとよ
かぞへける八十二人くけい
侍よハるとゆくあり此
後出まふるあるべし

此詩ありしひのあり
箋 女二宮八今までハ公を
とけさかぬが出来ハいかに
でしもえしぞ又雲ゐ
の局も此ざさ殺仕の地と
どの方におりつかれ何とう
と思はめでたくかけ給
業成アリ用捨乃筆
候へし

嫁よなり。此れたぐるまハ出ら御前ハ二ら御前ハ四
郎前ハ六郎前ハ地用い前中の前宮の前ハ又
の前と地より次ハ内侍ハ三の前ハ丸の前ハ治部
前ハ丹部前とぞかつりつかすべて十二人が
中よりうち得るかたくいとおかしけよそう
どりよ地ひ出待かう内侍どうしの前すら
あとるんぢおちおかしうこそさせかどあり
てられもぐれさらかう。三の前ハ御前ハびん
ぐの地くもみぞとりけるそうしつさは
つまかふ浪もこるれまそいどらくうし
給ハこの活るうしひのくしいひやかくさるすく